The Engine Dictionary

大　機　関　辞　典

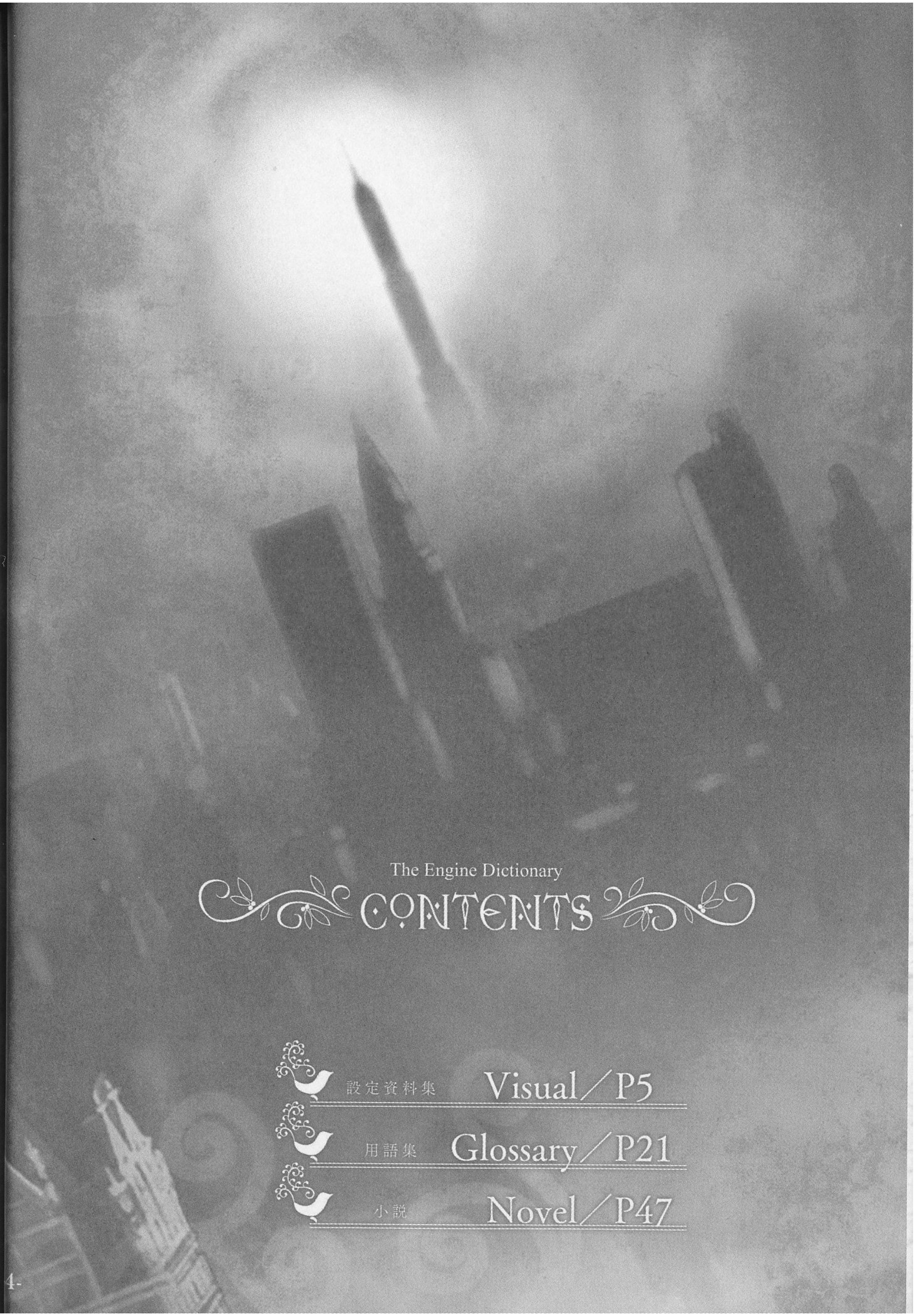


Liar-soft

The Engine Dictionary

大　機　関　辞　典

Liar soft



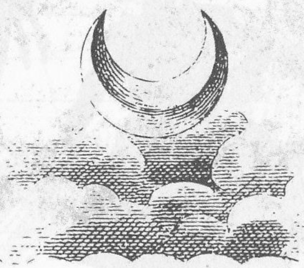
The Engine Dictionary

CONTENTS

The Engine Dictionary

Visual

設定資料集



rough sketch





Lily リリィ

「あそこに。あたしは、いいえ、あたしだけは、行かないといけない」



Elysia Wentworth エリシア・ウェントワース

「１日目。廃墟に足を踏み入れた。あの噂は正しかった。本当に、誰の姿もない」



The A A

「僕は導くだけだ。脳がないから。ここで何をするのか、すべて、きみ次第」



Lucky Luciano ラッキー・ルチアーノ

「俺の名前を知らないとは。あんた、ニューヨークっ子じゃねえな？」



Mao マオ

「なにしてんのさ、莫迦なリリィ。リリィは目があるのに見えないの？」



Lord Alva Edison エジソン卿

『チク・タク、チク・タク』



Jaguarman ジャガーマン

「ブエナス・ノーチェス！ 小娘め、挨拶もできない莫迦な小娘め！」



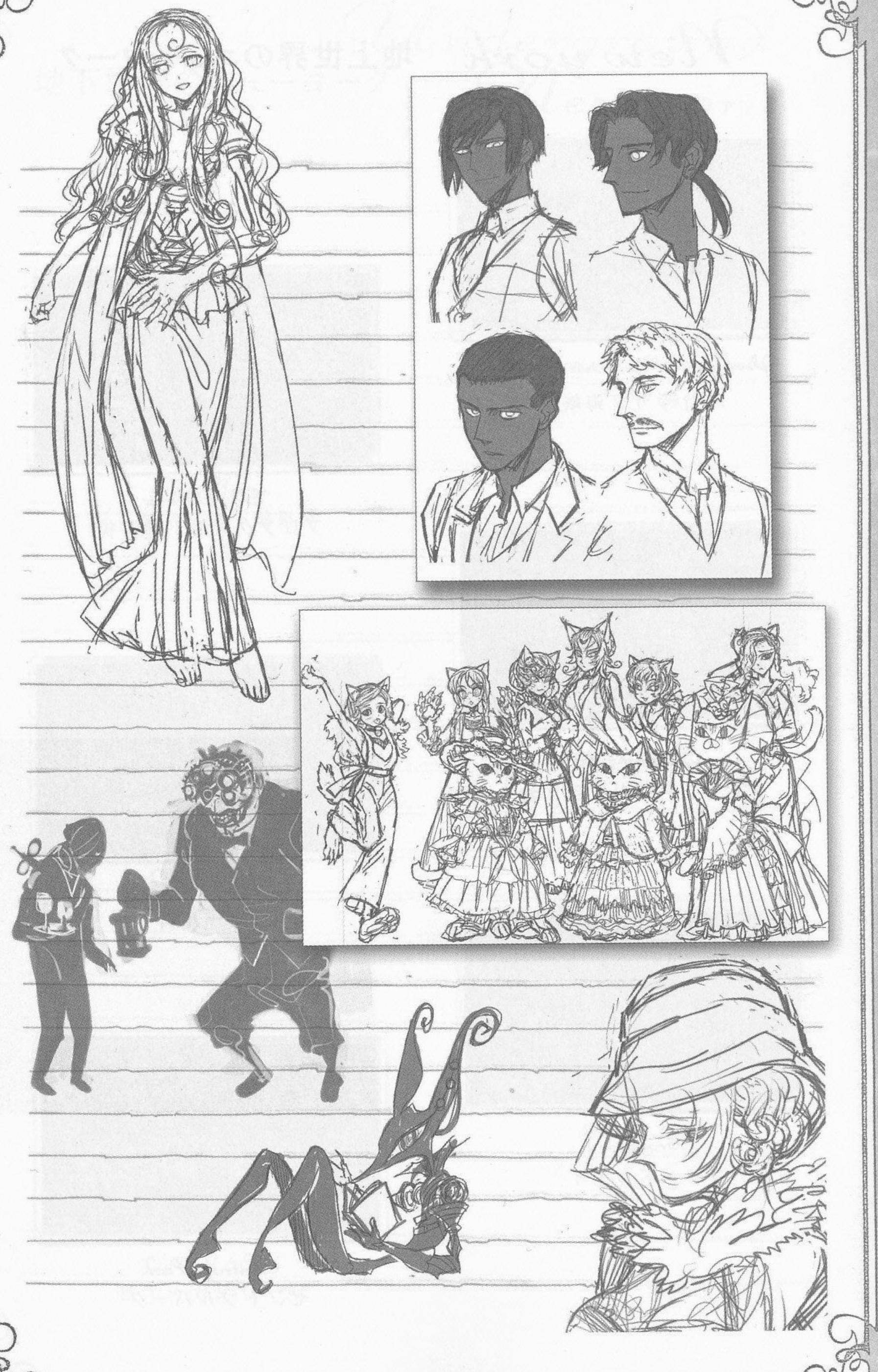
Memories 追憶の中の人々



Rose Witch 薔薇の魔女

「………………………」





New yorkers 地下世界の住人たち

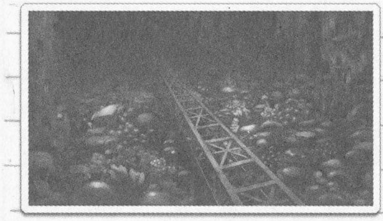


地下世界のニューヨーク

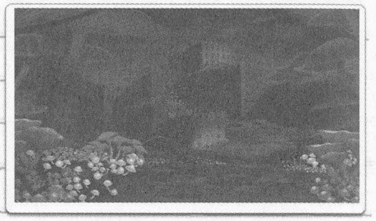
Underground New york



Verrazano-Narrows Bridge
ヴェラザノ海峡橋



The Bronx
ブロンクス地下通路街



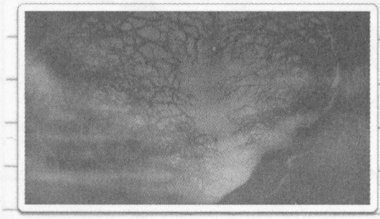
Queensbridge
クイーンズブリッジ団地



Wall Street
ウォール街



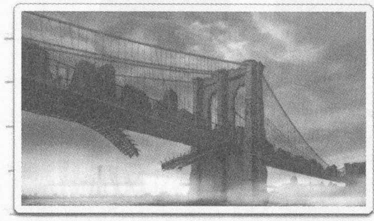
Broadway
ブロードウェイ



Central Park
セントラルパーク

New york

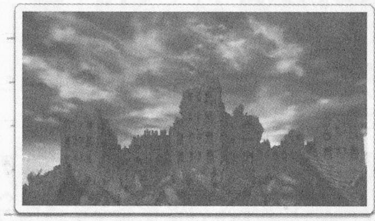
地上世界のニューヨーク



Verrazano-Narrows Bridge
ヴェラザノ海峡橋



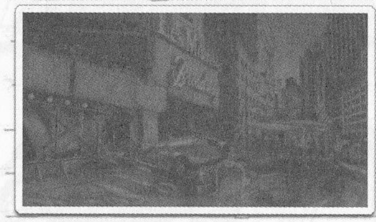
The Bronx
ブロンクス地下通路街



Queensbridge
クイーンズブリッジ団地



Wall Street
ウォール街



Broadway
ブロードウェイ

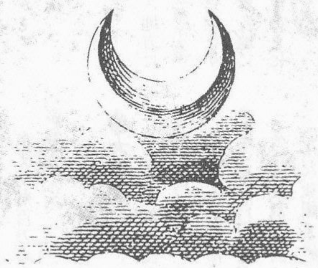


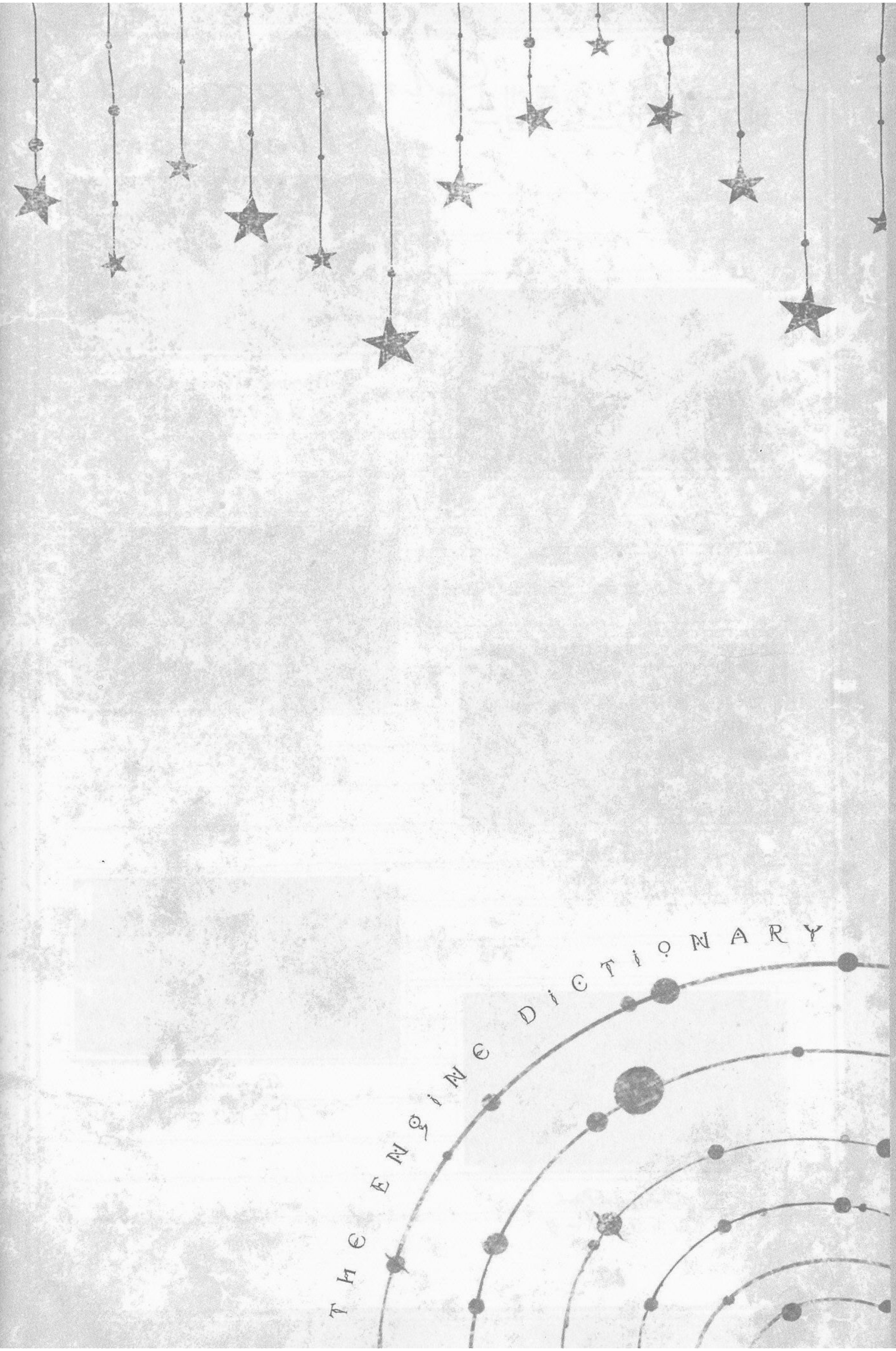
Central Park
セントラルパーク

The Engine Dictionary

Glossary

用語集





ソナーニル・ガイド【地上】

●廃墟都市ニューヨーク

作中における「厳然たる現実」。

廃墟。かつては世界最大の機関都市だったが、5年前、1902年に発生した異常災害《大消失》により、廃墟と化してしまった。排煙をもたらす工場がなくなった現在でも、常に灰色の雲と濁った雨に覆われている。

災害により、約300万の住人はすべてが死亡したとされている。

本作の開始時点である1907年現在では、合衆国政府によって完全封鎖されている。記録上、廃墟と化した後に正式な調査が行われたことはなく、立ち入った者はいない。

エリシアがたったひとりで歩き続ける場所。

●合衆国

アメリカ合衆国。作中では「アメリカ」とは呼ばれず、合衆国とのみ表現される。

本作の世界では蒸気文明が異常なまでに隆盛な歴史を歩んでいるため、わたしたちの史実におけるアメリカ合衆国との相違点が多々ある。

●カダス地方

英国の北方海域の彼方に存在するとされる異境。数十年前、異常発達した蒸気文明を世界各国へもたらした。セレナリアと呼ばれることもある。

ニューヨークで発生した大災害の原因は、本来はこの異境で数年前に行われ、失敗した、超大型蒸気機関（メガ・エンジン）の稼働実験ではないかという噂が一部情報筋で囁かれている。

●帝国

英国の彼方にある、とされるカダス地方における列強国家。

正式名称は北央帝国。蒸気文明華やかなりし巨大軍事国家。合衆国を始め、世界各地に異常発達した蒸気機関文明をもたらすことになった碩学の国。

帝国の空は、蒸気機関（エンジン）のもたらす排煙で永遠の灰色雲に覆われているという。

●灰色の空

カダスとの交流及び技術交換が行われた世界各地では、前世紀である19世紀の時点で既に、青空が失われている。カダスへと渡った欧州の碩学たちはあり得ないほどの性能を蒸気機関に与えるすべを見い出し、結果として、世界全土は機関（エンジン）で埋め尽くされることとなった。

瞬く間に世界各国を埋め尽くした蒸気機関群によって生み出された排煙は空を埋め尽くした。やがて、人々は青空を失い、天には永遠の灰色の空が充ちることとなった。

本作の舞台となるニューヨークでは、そこに時折「濁った雨」が加わる。

消えた幾百万の人々を悼むように、天は涙を流す。

●大消失

1907年現在から5年前に発生した、大規模災害。

世界最大の都市であったはずのニューヨークが一夜にして無人廃墟と化した事件。

公にはその原因は公表されていない。

ただ、個人的見解として当時のホワイトハウス報道官は「NYに数多あった大型蒸気機関（メガ・エンジン）の連鎖的暴走事故の可能性」を口にし、多くの新聞や人々がそれを信じた。

超大型蒸気機関（メガ・エンジン）の稼働実験の失敗であるとか、大規模火災であるとか、水害であるとか、局地型地震であるとか、新兵器の使用実験であるとか事故であるとか、さまざまな原因が無責任に噂されはしたが、現在ではそれらを語る者も多くはない。

何かがあって、恐らく事故で、NYと数百万の人々は消えた。

その事実が、公文書館の記録と、子供たちの教科書とに記されているのみ。

●現象数式実験

5年前のニューヨーク、マンハッタン島で行われた超常の物理実験。

エジソン財団によって主導された国家的実験計画であったが、失敗に終わったという。この実験の存在は一般には明らかにされておらず、エリシアも知らない。

アランはこの計画に携わっていた。

●ヴェラザノ海峡橋【地上】

大英帝国首都ロンドンにかつて存在した旧ロンドン・ブリッジをモデルとして建造された居住区画付の巨大海峡橋。かつてこの地を発見したといわれる西欧の探検家ヴェラツァーノの名を戴いている。

構造は上下2層に分かれており、上部に自動車用道路と居住区を備え、下部には機関列車の線路のみが走っていた。

上部は当初こそ先進的住宅地として上流、中流層の人間たちが居住したが、勢力争いを続けるニューヨーク・ギャング同士の抗争の結果、下層の人間たちが集うある種のスラムと化し道路機能も失いかけたが、やがて事実上の治外法権区域と化して治安と道路交通の安定を見た。

5年前の《大消失》の際にその機能を失った。現在は無人であるとされる。

●ザ・ブロンクス【地上】

かつてのギャングたちの街。多国籍なギャング、マフィアたちの街であり、日夜あちこちで抗争が行われていた犯罪の街であった。その地下にはアメリカン・ギャングとチャイニーズ・マフィアが争いを繰り広げる地下街が広がっていた。

最も有力なギャングの名として「レッド・ダイアモンズ」の名が挙げられる。

5年前の《大消失》の際に他地区と同じく廃墟と化した。

現在は無人であるとされる。

●ロング・アイランド【地上】

ニューヨーク・シティが多民族から成る多国籍都市であることを象徴する地区。

常に多くの移民で溢れかえる賑やかな地区であり、活気に溢れた街だった。中でもアパルトメント複合体であるクイーンズブリッジ団地は有名で、巨大な要塞の如き外観は一種の観光スポットとして機能していた。外国でもQB団地の名はよく知られていた。

5年前の《大消失》の際に他地区と同じく廃墟と化した。現在は無人であるとされる。

●マンハッタン島【地上】

ロング・アイランドやザ・ブロンクス、ブルックリンなどの「外区」も巨大な街であって都市の繁栄を窺うことが可能だが、それらとは大きく異なり、洗練された地区であり最先端の機関技術が街を発展させ、超高層建築が立ち並ぶ世界最大の摩天楼として知られていたのがこのマンハッタンである。

世界最大の機関都市であったニューヨーク・シティの象徴。

しかし、現在では、超高層建築のすべては廃墟であり、かつての見る影はない。

●ウォール街／ザ・ウォール【地上】

かつて19世紀初頭、ニューヨーク・シティが建造された際、外洋を越えて訪れる大英帝国艦隊などの外敵に相対するために巨大な壁が建造された。ザ・ウォールと呼称されるそれは、あらゆる攻撃からマンハッタンの軍事基地を守るための壁であり、軍艦からの砲撃を受けてもびくともしなかったという。

その後、合衆国が独立した後にマンハッタ

ンの軍事基地は撤去されたが、抵抗と誇りの象徴としてザ・ウォールはその偉容を残したまま都市は重機関都市へと発展することとなった。巨壁周辺の街は世界最大の金融街として発展を遂げ、故に、5年前の事件の際にはこの街を失ったことで世界経済は多大な影響を被ることとなった。

世界最大の超高層建築数を誇る摩天楼として知られていたが、5年前の《大消失》の際に他地区と同じく廃墟と化した。

現在は無人であるとされる。

●ブロードウェイ【地上】

マンハッタン南部の街。世界最大の歌の街、踊りの街、演劇の街、歌劇の街。

かつては幾つものホールや劇場が建ち並び、英国首都のウェストエンドもかくやというほどの賑わいを見せていた。近年世界各地で発展のめざましい『映画』なる娯楽も、この街に育てられた才能が形作ったものだと断言しても過言ではない。

華やかな文化の中心であり、摩天楼と並ぶニューヨーク・シティの象徴であった。

しかし、5年前の《大消失》の際に他地区と同じく廃墟と化した。

現在は無人であるとされる。

●セントラルパーク【地上】

マンハッタン中央に位置する広大な緑の園。ニューヨーク市民の憩いの場。

拡大するギャングたちの抗争がマンハッタン島へも手を伸ばした一時期にはここもまた銃撃の音が響く犯罪の森と化したが、合衆国政府と都市行政府が合同で行った治安回復運動によって、19世紀末からは子供たちの声が響く平穏の園へと姿を取り戻していた。

当初こそ夜間の立ち入りが禁止されていたが、ニューヨーク治安回復宣言が行われた1885年からは、全時刻において市民や観光客に開放されていた。

5年前の事件以来、無人の、異様にも結晶化した森の残骸だけが残っている。

●エンパイアステートビルII【地上】

世界最大の高層建築である。エンパイアステートビルI号塔はわたしたちの知る史実通りの場所、マンハッタン南部に存在しているが、II号塔は重機関工業区となったマンハッタンの北端に建造された。

世界最高の頭脳と称された《発明王》エジソン卿の私有物であり、最先端の機関技術の粋が集められた技術の園であり、彼の許可を得てさまざまな合衆国の公的機関や企業の研究部が設置されていた。大協会やロス・アラモス、碩学協会こと《西インド会社》の研究所もあったという。

ここもまた、5年前の《大消失》で廃墟と化したという。

ソナー二ル・ガイド【地下世界】

●地下世界

作中における「幻想の如き世界」。アンダーグラウンド・ニューヨーク。5年前に大災害で廃墟と化したはずの街並みがまるごと、広大きわまる地下空間に移された——といった風景である。

ただし、あちこちが歪み、戯画化されたように変化している。高層建築に黒い茨が絡まったり、建物の色が影のように黒ずんだり、直線だった柱が歪んだり、etc。

出口はなく、外（地上）に出ることはできない。

5年前に死んだはずの300万の人間が、地下世界の住人となっているという。しかし《御使い》に襲われることで、かなりの数を減らしている、ともされる。

一見では「災害の生存者たちが暮らす地下都市」である。

リリィは、ここを彷徨いながらマンハッタンの塔を目指す。

●地下世界の住人

アンダーグラウンド・ニューヨークに住まう人々。

地上のニューヨークに暮らしていたはずだが、5年前のある日、気付くと、すべての都市住人がこの異形に歪んだ世界の住人となっていた。何故そうなってしまったのか、5年前のあの日に何があったかを覚えている者はいない。いないことになっている。

奇妙なことに、地下の人々は死ぬことは決してない。けれど、7体の《御使い》のいずれかに襲われると、死ぬ。死んだような状態になる。その後、体の一部が鉄(メタル)と化して蘇るのである。

体のすべてを鉄(メタル)へと変えられた者は、物言わぬモールと化して、人間のように考えたり歩いたりすることのできない存在となってしまう。

5年の間に、地下世界に暮らす多くの人々がモールになってしまった。

●《ルフラン》

地下世界の住人に起こり得る特異な現象。

7体の《御使い》に襲われて「死」してもなお、その後、住人が無傷の状態で蘇ることがある。自動的に、体の一部を必ず鉄(メタル)へと換えながら。

この、一連の「死」から「鉄を伴う再生」を地下世界では《ルフラン》と呼ぶ。

多くの場合、記憶の一時的退行を伴う。消える記憶は数時間から数ヶ月までさまざまである。

●1輛だけの地下鉄

リリィの寝床となる場所。1輛だけの地下鉄で、内装は少女趣味満載の「女の子の部屋」のようになっている。ベッドもある、家具もある、カーテンもついている。仕切りの向こうにはシャワー付きの浴室がある。

ひとりでに走り始めたり停止したりする。

リリィはこの「1輛だけの地下鉄」を主な寝床とするが、移動手段としてはあまりアテにしておらず、歩いて移動しようとすることもある。（そういう時は、地下鉄はリリィを後から追いかける）

●ヴェラザノ海峡橋【地下世界】

ニューヨーク外区のひとつ。

廃墟の橋街。5年前の出来事で多くの建造物が瓦礫と化した。

現在では瓦礫と大茸に覆われた典型的な地下世界の街であり、路地には物言わぬモールたちが蠢き、辛うじて形を保った集合住宅の幾つかで人々が暮らしている。

●ザ・ブロンクス【地下世界】

ニューヨーク外区のひとつ。
大洞窟。地下世界の「更なる地下」である地下鉄通路のある位置には、地上と同じくアメリカン・ギャング勢力とチャイニーズ・マフィア勢力がかつて抗争を繰り広げた地下街は広がっておらず、大洞窟と化している。現在では人間の姿はなく、ダーク・ギャングたちの格納庫のような状態となっている。
街を統べるのはかつて「レッド・ダイアモンズ」のボスであった男、アーネスト・ヘミングウェイ。外区ニューヨークで活動するダーク・ギャングの主人であり、西の魔女と並んで東の魔女（アーネストは女性ではないが、西の魔女の対の存在ということで魔女の名が冠された）や東の赤王と呼ばれている。

●ロング・アイランド【地下世界】

ニューヨーク外区のひとつ。
かつての移民の街。現在はモールやグレムリンが極めて多く蠢く静寂の街である。
地下世界の人間の数も少ない。5年前、地下世界で人々が目覚めた時には地上と同じく数多の人々がいたはずだが、《御使い》によってモールへと変えられてしまったのだ。
中でも、アパルトメント複合体であるクイーンズブリッジ団地には、言葉を話すことのできるまともな人間は2人しかいないという。他の住人はすべてモールかグレムリンであり、静寂の城、静寂の街として地下世界では知られている。

●マンハッタン島【地下世界】

外観であれば地上よりも地下世界のマンハッタンは勇壮である。
地下世界を覆う紫色をした偽物の空を生むものこそがこのマンハッタンの北端、紫影の塔であり、地上と同じく人のいない廃墟であるはずの摩天楼の影も、どこか、異様なまでの威容を伴って地下世界の人々の目に映る。
外区ニューヨークの人間にとって、マンハッタンは「行くことのできない場所」であり、ある種の畏怖を伴って名を囁かれる。
地下マンハッタンにも、ブロードウェイやウォール街などに暮らしている人々の姿は在ると言われるが、外区の人々にとってはすべてが噂であり、真実は定かでない。

●ウォール街／ザ・ウォール【地下世界】

偶然にも外区の人間がマンハッタンへ至ることができたとしても、ここで阻まれる。
5年前やもっと以前と変わらず、この街にはザ・ウォールが聳えており、5年前までとは違ってその扉は閉ざされ、行き来は出来ない。
ウォール街にただひとり住む少年が扉の鍵を有しているとされ、彼は、ザ・ウォールの向こうからこちらへ出てくる者は通すが、ザ・ウォールの向こうへ行こうとする者を絶対に通さないのだという。
少年に逆らうことはできない。彼以外には誰ひとりとして人間が存在しないウォール街に在って、今や、猫から人の姿へと転じたと噂される猫（ネコビト）たちこそが街のあるじであって、彼女ら猫（ネコビト）を統べる少年の意思はここでは絶対なのである。
彼によって、猫（ネコビト）以外の者は誰もウォール街へ入ることを禁じられているのだ。

●ブロードウェイ【地下世界】

ザ・ウォールで隔てられているために訪れる者はひとりもいない。しかし、ここは、地下世界で最も華やかで賑やかな街である。
5年前に起きた“何か”の後、目覚めた時にこの街にいた人間たちは、地下世界における他の人間たちと同じく、以前と同じように暮らすことを選んだ。すなわちこの街を住処とする彼らは歌ったのだ。歌い、奏で、踊り、演じ続けた。5年間ずっと。巨壁の向こうから、目を輝かせて期待に充ちた観客がいつか訪れることを信じながら。
5年を経た現在では、歌い奏で演じ続ける人間の数は激減している。《御使い》は壁に隔てられたはずのこの場所にも出現し、人々を襲っている。
それでも彼らは歌い、奏で、演じ続ける。
いつか観客が訪れることを夢見て。

●セントラルパーク【地下世界】

広大な石の園。地下世界の人間たちの畏怖する森。
ダーク・ギャングを率いる西の魔女が座す森であるとされている。巨壁に守られたマンハッタンには誰も立ち入ったことはないはずだが、その森の異様な姿は噂として地下世界に伝わっている。即ち、かつて緑の木々であったはずものは、冷たく無機質な化石となり、魔女の恐ろしさを囁く声が常に森には満ちているという噂である。

●トレヴァー・タワー

紫色をした偽物の空の源、紫色の空の果て、紫影の塔。
幾つもの名で囁かれる、地下世界の最果て。
多くの地下世界の人々にとっては、ただ、不気味に聳えるだけの塔である。
ただひとり、リリィだけが、この場所を目指して旅をする。

地上の技術

●機関（エンジン）

現代蒸気機関（エンジン）文明の要たる機械。
あらゆる機械の動力であり、高度な演算を果たす計算機であり、情報処理機械でもある、現在の合衆国における繁栄の要である。
外燃機関（エンジン）であり、大型であればあるほど出力を増す。
合衆国を始めとする先進国のほぼ全域で、各都市や軍事施設にはごく大型の中央機関（セントラルエンジン）がひとつずつ設置されている。富裕層の邸宅や機関（エンジン）工場には大型から中型までの機関（エンジン）が設置され、一般の市民のレベルになると、小型の機関（エンジン）が各戸にひとつずつ存在する、という形になる。
かつて1690年に発明された動力機械だが、カダス地方ではその遙か以前から存在していたという。

●第2次産業革命／機関革命

1827年、異境たるカダス地方へ渡った英国人碩学チャールズ・バベッジが作り出した《大階差機関（ディファレンス・エンジン）》によって発生した、機関産業および機関技術の革命。

カダス世界を中心として発生し、やがて１年と経たずに革命の嵐は欧州全土を覆うこととなった。採掘技術、農耕用蒸気機関、機動要塞理論などのさまざまな驚異の技術がもたらされ、中でも数学概念とその適用法の発展はめざましく、計算機関（情報処理機関）に対する国家の思考さえをも塗り替えた。

人類は歴史上稀に見る繁栄を謳歌するに至った。

しかし、数々の発展と引き替えに人類が失ったものがあった。清浄な空と海、そして大地である。カダス地方や欧州だけでなく、無論合衆国も、アジア全土、アフリカ、人類の住まうすべての大地は灰色の空と暗い海に覆われ、現在も変わることがない。

●機関（エンジン）カード

高密度の情報圧縮処理が施された記録媒体。

原始的な計算機関（エンジン）に用いられていたパンチカードの発展形であるが、記録された情報量は遙かに桁違いである。さまざまな情報を常時上書きで刻むことが可能となっている。

●動作用機関カード

情報処理以外の用途としては最も一般的な機関（エンジン）カードである。機関機械（エンジン・マシン）の動作命令が組み込まれている。

飛空艇や蒸気式ガーニーなど、リアルタイムの入力を必要とする機関機械（エンジン・マシン）を自在に操るためには、動作用機関カードを大量に用意し、状況に応じて最適なカードを差し込んで命令を入力していかなくてはならない。

多くの機関機械（エンジン・マシン）は、状況に対応した動作用機関（エンジン）カードの詰め合わせをスイッチひとつで入力する“通常操縦”で動いているものの、熟達者ともなれば、動作用機関（エンジン）カードを素早く入力し続け、あらゆる状況で自在に対応してみせるだろう。

●個人機関（パーソナルエンジン）カード

先進国に暮らす人々の多くに与えられる機関（エンジン）カード。

出生記録から学歴、職歴など、さまざまな個人情報の他、自画像をおさめた篆刻写真の情報も入っており、失踪時や逃亡時の捜索の手がかりとして各国政府の管理体制に大きく貢献している。

合衆国では前世紀１８９９年から試験的導入が始まっている。

カダス列強たる“帝国”すなわち北央帝国では特にこの制度が徹底され、最早、これなくして北央で生きることはできないとさえ表現される。実際のところ、北央帝国においては、病院や銀行の利用、電信の使用、旅券の入手など、機関（エンジン）の絡んだ公共施設、および商店での金銭取引の際には個人機関（パーソナルエンジン）カードの提示が義務づけられているという。

提示された機関（エンジン）カードには国家から寄与された計算機関によって利用や取引の記録が刻印され、同時に、臣民情報を管理する各都市の中央機関（セントラルエンジン）に同様の記録が保存される。

これらの記録は定期的に帝都に送付され、事実上、帝都は臣民すべての情報を常に有することとなる。等級の高い都市では完全な管理体制が敷かれているものの、辺境の都市では機関（エンジン）カードの提示を求めないヤミの商店や医院が複数存在しており、常に管理警察や管理軍の脅威に晒されているという。

●蒸気管／導力管

機関（エンジン）からのエネルギー供給を行う送気管。

あらゆる機械の動力とするために、ひとつの機関（エンジン）に複数の蒸気管を繋げることが一般的である。

各機械へ送る動力の調整は、施設や家庭では機関室で行われる。飛空艇や飛行船であれば、操舵室（操縦室）からでもその配置を変えることが可能である。

●機関接続口

蒸気管の動力を機械へ繋げるための接続口。

継ぎ足しや組み換えが可能なユニバーサルジョイントを実現しており、その規格はほぼ各国家ごとに統一されている。

乾燥機、調理器（オーブン）や計算（演算）機、冷蔵庫、洗濯機、等々……。各家庭では常に、ひとつしかない機関（エンジン）に対して、同時に接続できる数の限られた各機械をどう扱いどう接続するかの判断が要求される。

●工場製機関機械

都市に充ちる機関（エンジン）工場で大量生産される機械のこと。機関（エンジン）が動力や計算・情報処理機械として必ず用いられているため「機関機械（エンジン・マシン）」と呼ばれる。

大量生産に耐えうる設計が求められるため、高度かつ精緻な設計で作られる碩学機械ほどの性能の機械は生産されない――という通説がかつては存在していたが、近年の技術革新により飛躍的な品質の向上と技術力の拡大が行われ、携帯型の電信通信機（エンジン・フォン）を始めとする精密機械が大量生産され始める時代が訪れている。英国に続き、合衆国においても、若年層を中心に携帯型電信通信機（エンジン・フォン）は流行し始めている。

●碩学機械

碩学独自の理論と思想によって作られた機関機械（エンジン・マシン）。大量生産を前提としていない、基本的にワンメイドの発明品である。

王侯連合南部に端を発する「インガノック・テクノロジー」なる革新的技術の到来によって工場製機関機械（エンジン・マシン）がその性能と精度を上昇させつつある現在でも、未だに多くの碩学機械は工場製品とは一線を画した性能を誇っている。

●碩学

あらゆる科学者を指す尊称。

人類の発展を担う希少な人材であるとされ、人々からは常に尊ばれる。

カダス地方では「碩学協会」もしくは《西インド会社》と呼ばれる国家組織がほぼすべての碩学を管理しており、難関と言われる試験によって優秀な頭脳を選定している。

英国や合衆国においても同様の管理計画が発案されているものの、未だ試験制度などは存在せず、個人の実績を鑑みて碩学位の称号を与えるという方式に留まっている。

●大機関（メガ・エンジン）

文明圏の都市や軍で使用される大型機関（エンジン）。高出力と、高い計算・演算能力を有している。

その製造と起動には多大なコストと時間を要し、合衆国においては政府及び軍関係施設や巨大企業のみが保有しており、なおかつ国家的な管理体制下にある。

●電信通信機（エンジン・フォン）

電気信号に変換した文字情報や音声を遠方へと伝える機関機械（エンジン・マシン）。電気は勿論、機関の動力から発生させている。送信側と受信側の双方に同機能の機械が必須であり、片方だけでは通信が成立しない。

かつては電信文をカード式で送るものが殆どだったが、１９０５年以降は、声を送受信して遠方との会話を成立させる会話式電信通信機（エンジン・フォン）が主流である。

英国、機関都市ロンドンにおいては特に一般化が進み、持ち運びが容易な携帯型の電信通信機（エンジン・フォン）を多くの市民が所持している。中流階級の子女の間では、宝飾品ブランドから発売されている宝石つきの電信通信機（エンジン・フォン）が流行しているという。かつては大きな台を必要とした通信機も、今や持ち運び、ファッション

の一部でさえある。
英国の流行を追いかける形で、最近では合衆国の若者にも人気がある。

●篆刻写真（てんこく）

細かな点で描かれた写真。
機関式篆刻描画装置によるプリントアウトのことを指す。人物や風景を写して記録することができる。
英国、機関都市ロンドンにおいては、街角に設置された証明写真用篆刻機関を用いて、恋人や友人同士で写真を撮るのが流行し、合衆国でも数年遅れで流行が始まっている。

●携帯秘書装置（ポケット・セクレタリ）

気晶式画像表示版（エア・モニター）を用いた最新機械。通信のみならず、さまざまな機能が備わった、まさしく小さな秘書とも呼ぶべき機械装置。薄くて小型のモニター板といった外見で、感圧機能が備わっており、指で直接画面に触れて操作する。超国家規模の計画によって世界各地の大都市で試験的に導入されつつあるという共通規格のエネルギー／情報ネットワークと接続することで、公称される機能以上の働きを見せる。
小型機械としてはきわめて高価なものであり、1908年段階では普及型の蒸気自動車一台ぶんの価格。量産型の機関機械ではあるものの、量産用の工場には碩学工場にきわめて近い精度と専用設備の充実が必要されるため、感覚的には碩学機械に近い。
先進各国では、富裕層のうち、大企業の人間や高級官僚等の間で静かな人気を呼んでいる。(一方で、碩学たちにはさほど人気がない。よく似た機能を有する碩学機械を自分もしくは知己の碩学が製作し、所有しているためである)

●蒸気機関式ガーニー

蒸気機関を利用した地上移動機械。別称は「蒸気自動車」とも。
おおむね走行輪によって移動する。大量生産品の多くは四輪であるが、碩学が作る機械には一輪や二輪のものも存在し、走行輪でなく多脚であることとすらある。
合衆国はガーニーの世界的先進国であり、大小さまざまな専門企業が乱立し、日々、新型のガーニーが開発・生産されている。中でもフォード社は合衆国を代表する大企業であり、欧州やアジアをはじめ、カダス地方への輸出も好調である。

●地下鉄

地下トンネルを利用した移動機械。地下鉄とは、機関（エンジン）によって発生する圧縮蒸気を噴出させ、その圧力で車輌を撃ち出すという、革新的な移動機械である。
たとえばカダス北央帝国や英国では完全なチューブ状態を形成した地下鉄の開発に成功しており、都市の地下を走らせている。
重機関都市ニューヨークにおいては、試験的にこれら気送式とは異なる方式での電力式地下鉄計画が進められ、実用されていたとされる。

●蒸気病

機関（エンジン）排煙を吸い込み続けることで発症する、呼吸器を致命的に侵す病気。機関のあるところこの病がつきまとう。
技術先進国で見受けられる病であり、合衆国においても近年では特に顕著な増加傾向にあり、重大な社会問題のひとつとされている。

●コート

コート。外套。都市部に暮らす合衆国の人間がよく用いているもの。大英帝国ロンドンにおける日傘と同じ役割を果たしている。すなわち、機関（エンジン）の煤よけ、である。
英国の傘とは違い実直な見た目が多いものの、女性を中心に装飾やデザインを重視したものが広まり始めている。

●列車

飛行船と並び、合衆国における流通の中核を成す陸上移動機械。蒸気式機関列車。
新大陸各地を駆け巡るカダス地方式の弾丸列車（高速列車）は、ガーニーと並んで合衆国を象徴する風景のひとつである。
中でも東部と西部を繋ぐ新大陸横断鉄道は砲弾列車と呼ばれ、大機関（メガ・エンジン）を搭載し、確認されている中では世界最大の巨体を誇る列車であるという。

●砲弾列車

広大な合衆国における鉄道交通の象徴のひとつ。
新大陸の西海岸から東海岸、サンフランシスコ＝アトランティックシティ間を結ぶ長距離蒸気鉄道であり、大機関を搭載しており、通常の蒸気機関車の倍ほどの巨躯を誇る。合衆国のみならず諸外国にもその名は広く知れ渡っており、高価であるにも関わらず乗車切符は常に品薄状態。
1902年末の消失事件まで東海岸側の終点はNYだったが、1903年以降はアトランティックシティへ変更されている、

●大陸間横断鉄道

新大陸とユーラシア大陸とを結ぶ超規模の大鉄道。超長距離鉄道。大陸間鉄道とのみ呼ばれることも多い。列車の大きさは砲弾列車に近く多くの車輌が二階建て。
新大陸側にもユーラシア大陸側にも中継駅（中継都市）が存在する。新大陸側の中継都市はアラスカのシトカ・シティ。ユーラシア大陸側の中継駅はサハリン島のシティ・ヴォストク。
明確な始発と終点は規定されていないものの、新大陸北域（カナダ）からユーラシア大陸中部から東部（オリエンタル域）に終点駅が設定されることが多い。大陸間横断鉄道の主体は線路ではなく、蒸気機関車そのものにある。特有の線路はシトカからヴォストクまでであり、以降は地域ごとの鉄道線路に乗り入れることとなる。
乗車切符は品薄でこそないものの、砲弾列車以上の価格を誇る。基本的には上流層にのみ開放された切符であり、ひとたびそれを手に入れて列車に乗り込めば、終点までの間は貴族の如き扱いを受けるという。富裕層にとっては当然のサービスではあるものの、一般市民からは羨望の的となっている。

●飛行船

列車と並び、合衆国における流通の中核を成す空中移動機械。
ドイツで発明された飛行船を発展させたものが多く用いられている。
空気よりも軽い水素もしくはヘリウムを詰めた気嚢（バルーン）を複数用いて機体を浮き上がらせ、推進用の機関動力である程度の操縦性を備え、空を移動する。
先進国で見られる飛行船は、大量の物資や人員を搭載することが可能である大型の硬式飛行船が主流である。

●飛空艇

碩学式の蒸気機関を利用した空中移動機械。
しかし、碩学機械に依る浮力発生装置の存在が必須となる小型の飛行用船舶であり、機関（エンジン）工場での大量生産が不可能である。碩学機械の多くは、その機械に使われる技術の一般化が進まなければ生産できない故に"飛空艇"が文明圏に存在する数は大型飛行船に比して限られている。
輸送用を意図した大型、中型のものが一般的。文明圏全域でそれなりに普及しているが、特に、地域に密着した碩学が多い地域に数が

多い。合衆国においては西部でその姿をよく見ることができる。

技術上、エネルギー効率上の根本的問題（大出力は大型機関（メガ・エンジン）でしか得られない）から、小型のものは工場では製造されない。

ただし、再現性の困難な高度な技術を用いられた碩学機械に関しては、話は別である。小型飛空艇は必ず碩学機械であり、それを見た巷の飛空艇乗りや飛行船船団員たちの間からは「操縦しづらいじゃじゃ馬をよくも乗りこなすものだ」と称賛を受けることになるだろう。

●海洋船舶

飛行船技術が隆盛となっている文明圏において、移動輸送手段に船舶が用いられる割合はほぼゼロである。合衆国においてもそれは同じことだ。

第一の理由は機関（エンジン）工場の排煙が海へと溶け込む海洋汚染により海産資源が激減したため。第二の理由は、汚染された海水の粘度が急激に高くなり、それまで用いられていた船舶技術が通用しなくなったためである。

第二の理由を打開するため、蒸気機関を用いた船舶の開発が全世界で行われたものの、大量生産が可能な飛行船に比べ費用対効果が悪く、汚染海水に浸かった機構の整備が非常に困難である点も指摘され、現在では開発は中止されている。

かつて海洋を主とした輸送は、航空へ転化していったのである。

●気送

機関（エンジン）による圧縮空気を利用した手紙の運送機構。合衆国においても大都市や大型の公的施設、高官の邸宅などで使用されている。

気送式地下鉄構想の元となった、英国由来の技術。

●機動要塞

空中移動型の巨大制圧兵器。動く城塞、といった様相を呈している。

機動要塞理論に基づいて設計された蒸気機関兵器群のひとつであり、破壊の尖兵。

約50年前に勃発したカダス2次大戦の際に帝国の秘密兵器として登場し、悪名高き南ハ帝国とエイシャ連邦を地図上から消し去り、帝国を圧倒的勝利に導いた。

1次大戦で無敵の強さを誇ったはずの地上戦車を完膚無きまでに破壊し、敵の砦や城塞を打ち砕いたとされる（対する帝国空軍の機動要塞には1基の損害もなかったという）。

先進各国はこの機動要塞の入手もしくは開発に臨んでいるものの、入手は英国のみ、開発の実現に至ったのは未だ合衆国のみである。と、される。市民の多くにこの事実は公開されておらず、ロス・アラモス研究所内でのみ稼働実験が繰り返されている。

●機動要塞理論

カダスにおける飛空制圧式の戦略および戦術理論。偉大な《十碩学》のひとりであり、その中においては数少ない北央帝国生まれの碩学である《鋼博士》ルクレールが約70年前に提唱した理論。軍用の大型機関（メガ・エンジン）の開発の推奨と、それを利用した機動要塞の設計、その運用についてが記されている。

特に戦術理論には非常に複雑かつ高度な計算論が含まれており、この論の理解度と、それを基にした発展理論を形成できるかどうかが、次世代兵器たる機動要塞を操る全将校に求められる能力であるとされる。

合衆国空軍では既に前世紀から将校育成プログラムに組み込まれており、帝国から専門の碩学や軍人を招聘することは勿論、大協会やロス・アラモスの全面協力によって独自の発展理論の構築も行われていると噂される。

●機動鎧

機動要塞理論を目にした当時の帝国皇帝ヒュブリスが提唱した装甲論、そして人工筋

肉理論に基づいて開発された“小型戦闘装甲車輌”及び“小型機動要塞”である。稼働の際に複数もしくは多量の人員を必要とする地上戦車や機動要塞と異なり、機動鎧の搭乗者（操縦者）は1人のみである。

機動要塞にさえ匹敵する強力な試作機が25機製作された、との記録が帝国首都の皇帝城に残されているが、現在では、ヒュブリス帝の逝去と共に人工筋肉理論そのものが失われているため、研究開発は中断しているという。

一説によれば、古代文明の遺跡に残された金属製の巨人を基にしたともされているが、真偽は不明である。

●人工筋肉理論

機関革命を発生させた北央帝国皇帝ヒュブリスが提唱した理論。

情報処理機械としての機関（エンジン）と人間との密接な有機的接続と、戦闘用機関機械（エンジン・マシン）の有機的・生物的な挙動を可能とさせるための特殊機構を成すための理論である。ヒュブリス帝の逝去（失踪とも言われる）と共に失われたとされる。

昨年、現在にも残っている理論の片鱗が、北方辺境に残る“極北の《巨神》伝説”の一節に酷似しているとの指摘がとあるタブロイド誌に記載されたが、記事を作成した記者は不可解な変死を遂げている。

●《大階差機関（ディファレンス・エンジン）》

北央帝国で《十碩学》の称号を得た英国人チャールズ・バベッジの生み出した、超大型の機関式大情報処理機械。すべての“情報処理機械としての機関（エンジン）”の始祖である。これが生み出されたことにより、機関文明は飛躍的な向上を行うこととなった。

きわめて高度な演算処理、および超高密度の情報圧縮能力を持ち、帝国全土の全情報を処理し続けてなお余力を有していると言われる。

合衆国を始めとする先進各国に存在する大機関（メガ・エンジン）は、この模造品であるという。

●数秘機関（クラック・エンジン）

特殊な《数式》を用いることで成立した、人体置換もしくは埋め込み式の機関機械（エンジン・マシン）。

他の地には存在しない、隔絶されたインガノック独自の機関機械（エンジン・マシン）である。元は、異常現象のために生活が困難なまでに四肢を変異させてしまった人の義肢として開発されたが、現在では応用が進み、頭脳や身体を強化させることさえ可能となった。

一部の人々はこの技術を「サイバネティクス」と呼称する。

エジソン財団は、この技術をインガノック解放以前より所有していたという噂がある。

地下の異形

●モール

鉄（メタル）へと変わってしまった人々。

地下世界に蠢く人々。黒い影のように蠢くもの。喋ることができない。

頭に袋を被ったものや、獣（特にもぐら）のようなものなど、複数の種類がいるが、どれも総じて体のすべてが鉄（メタル）となっている。

元は生身の人間の姿をしていたが、地下世界における《御使い》のもたらす死の後の機械的再生である《ルフラン》を繰り返した結果、肉体のほぼすべてが機械化してしまった。最早話すこともできず、ただ、ゆっくりと動くことができるだけ。

ジャガーマンは彼らを時折「機械びと（サイバーゾンビー）」と呼ぶ。

NYが地下世界へと落ちてから5年が過ぎた現在では、人々の多くがこの形態になってしまっている。

●グレムリン

異形の地下世界のあちこちに現れる、小さな黒い生き物たち。

体のほぼすべてが鉄（メタル）へと変わっている。

地下世界の住人。どこにでもいるが、特に、地下トンネルに多く住む。他の誰にも聞こえないが、リリィにだけは、この小さな生き物たちは英語を喋る。

いつも腹を空かせており、食べ物を要求している。撫でるとキャッキャと喜んで食べ物のことを忘れるが、しばらくすると思い出してまた騒ぐ。5分ほど撫でると、半日は騒がなくなる。

ちなみに、本当に食べ物をあげると、満足して飛び立ってしまう。そして消える。

●ダーク・ギャング

5年前のあの日以来、異形へと歪んだギャングたち。

地下世界のあちこちを徘徊してリリィをつけ狙う。人々からは、暴力的ならずもの、自分たちの敵わない力強いもの、として認識され、避けられ嫌われている。外区の一部では《ルフラン》はダーク・ギャングが引き起こすものと噂されているが、誤り。

体のほぼすべてが鉄（メタル）となっており、鉄の半巨人、といった風貌。

大抵は黒くて大柄で鈍重だが、ごくたまに白くて細身で俊敏な個体が存在する。

●猫娘たち

地下世界のマンハッタン、ウォール街に住む猫たち。複数。

さまざまな猫が擬人化されている。

マオのように自意識が独自に発達しかけている個体もいれば、猫の習性のみで行動する個体もいる。総じてルース＝Bをリーダーとして認めており、彼の言葉には絶対服従。

大抵はマオやルシャのように意識が成長しきっていないため、頭は悪い。

●西の魔女

魔女。地下世界のセントラルパークに住むという女。

あらゆるダーク・ギャングを統べ、恐るべき《御使い》さえも操って、地下世界の人々を苦しめるという。彼女を語る噂には恐るべき女というものが多いが、中には慈悲深い女であるという噂も混ざっている。

●《御使い》

閉ざされた地下世界に出現する死の怪物、それが7体の《御使い》である。これらはすべて白く、悪意が戯画化されたかのような、抽象的で幻想じみた姿を備えている。

この7体の怪物は地下世界の人々を探し出しては、襲い、殺す。《ルフラン》が行われて人々が蘇れば、また見つけ出して殺す。何度でも。何度でも。

ただし、彼らの行動にはある種の法則があり、決まった人物だけを襲う。αという人物が第1の《御使い》に狙われる場合、第2から第7までの《御使い》は決して人物αを襲わない。彼らは、自分の獲物と定められた人物のみを襲うのである。唯一の例外はリリィであり、リリィを襲う時に限って、怪物たちは法則を破ることがある。

個体によってリリィを狙うものと狙わないものがある。

また、この怪物たちは決して地下世界の人々には傷つけられない。

・第1の《御使い》……圧の天使。
・第2の《御使い》……炎の天使。
・第3の《御使い》……風の天使。
・第4の《御使い》……影の天使。
・第5の《御使い》……刃の天使。
・第6の《御使い》……水の天使。
・第7の《御使い》……幻の天使。

●《薔薇の魔女》

地下世界で噂される存在。

西の魔女よりも遥かに恐ろしい存在で、冷酷で、残酷で、無慈悲で、黄金に祝福されているが、その力は地下世界に害をもたらすという。

●チクタクマン

謎の存在。

地下世界の何処からか、すべての人々を見つめているという。西の魔女さえこの謎の存在の支配下にあるという。正体は不明。

歯車と時計で構成された体を持ち、異形の《時間人間（チクタクマン）》を名乗るというが、その噂を語った者も今では物言わぬモールであり、今では誰もそう語る者はいない。

かつての噂においては、その顔は歯車と鋼鉄でできているとも、顔からは絶えず炎が噴き上がって光輝いているとも、発明王ことエジソン卿と同じ顔をしているとも、さまざまなものが囁かれていた。

●《クリッター》

リリィを守る異形にして、Aの操る鋼鉄の怪物。

鋼鉄の騎士、牙持つ獅子、黒衣の怪人。計3体。すべて鋼鉄で構成されている。

恐るべき異形としての姿を備える彼ら《クリッター》は、ほぼ唯一、7体の《御使い》を破壊し得る存在である。時にリリィへも牙を剥く7体の怪物に対して立ち向かい、これを破壊する。

必ずAの影から出現するが、その正体は不明。

カダスの異形都市インガノックに出現し恐るべき数の犠牲者を生み出した、として各国の機密情報として伝わる異形群クリッターと同名である理由も、不明。

●クリッター・ランバージャック

鋼鉄で構成されている。

全体的には逞しい人型。巨大な長い腕と、短い脚。両腕の先が手ではなく大きな斧状。

頭部はあるが顔がない。目しかない。

体にゼンマイ捻子（ねじ）が突き刺さっている。

●クリッター・アントライオン

鋼鉄で構成されている。

全体的にはクモ型。長い八本の脚と、巨大な牙を持つ頭部。

頭部はあるが、口しかなく、鼻や目、複眼などは存在しない。

体にゼンマイ捻子（ねじ）が突き刺さっている。

●クリッター・スケアクロウ

鋼鉄で構成されている。

全体的には細い細い人型。黒いボロボロのマントを纏っている。

大きな大きな鎌を携えている。
いわゆる「死神」に似たシルエット。
頭部はあるが顔がない。
体にゼンマイ捻子(ねじ)が突き刺さっている。

●クリッター・ハウラーインダークネス

黒色のクリッター。
漆黒で構成されている。
三つの脚と異様にねじれた巨腕を有する影の巨人。
頭部はねじれており、無貌。
夢幻の彼方でこれを見た者は「黒の王の眷属」と呼称した。

その他

●機関都市ロンドン

欧州における最大の都市のひとつ。
英国首都。カダス地方との技術的及び物資的交流が唯一行われている都市であり、英国の中心にして、欧州における機関文明の中心地でもある。
第2次産業革命こと「機関革命」の後に最大級の機関工業都市として発展し、霧と排煙の充ちる「機関都市」と呼ばれるまでに至った。今や、ロンドンは歴史的建築物と高層建築、そして複合超高層高架が立ち並ぶ機関都市であり、機関と排煙のないエリアは存在しない。
旧来の支配層である貴族階級の栄華に加え、野心的な中流階級の企業家たちの隆盛も華やかになりつつあり、日々、工業と文化の発展が続いているという。
長らくヴィクトリア女王による治世が続いたが、女王は昨年に崩御。1907年現在ではジョージ5世が王位を継ぎ、ゆるやかに改革を推し進めている。

●異形都市インガノック

カダス地方に存在する湖上の大型機関都市。
ひとつの巨大な城のようにも見える、アーコロジー都市計画に基づいて建造されていた多層環境型都市。幾層もに連なった巨大構造体(メガストラクチュア)であり、擁する人民は一時期では100万を超えていた。建造の際、ニューヨークのマンハッタンを第1層部分のモデルとしたという。
現在より4年前の1903年、爆発的に発生した《無限霧》に包まれて外部との接触が不可能となったという。恐ろしい霧に包まれて、都市は異形のものに変化してしまったのだ。空や海と同じように。周辺地域の人々は口々にそう囁いて、かつての最先端都市を異形都市と呼んだ。
しかし、1904年末、都市は突如として開放された。都市全土を包む霧は消え失せて、外部との交流が再び行われることとなった。現在、この都市のことを口にする者は多くない。インガノックの名は、隔絶されていた間に異形発達した先進技術「インガノック・テクノロジー」の驚異と偉業を指す時のみに囁かれて、都市そのものを語る者は合衆国はおろかカダスでも殆どいない。

裏社会に通じるごく一部の碩学たちの間では、1903年のこの都市では現象数式実験が行われていたと噂されている。

●隙間

世界各地の主要都市で見受けられる現象。
永遠の灰色雲に覆われて星も太陽も見えないはずの空に生まれた、僅かな雲の切れ目。
たとえば大英帝国。クリスタルパレス跡地公園の直上には、灰色雲から僅かな隙間が覗いている。確かに隙間が確認できるのは、不可解なことに跡地公園でのみであり、一歩でも外に出ると何故か見えない。
こういった不可解な場所が、世界各国の主要都市に必ず一箇所は存在しているという。更には、隙間に「青空」が見えるという噂がある。けれど、冗談でそう言う人はいても、実際に見えるという人間は誰も現れていないという。
青空の意味するところを皆が失ってしまっているのだとフランスの詩人は語る。
ニューヨークには、この隙間は存在しない。

●太陽光

世界各地の主要都市で見受けられる現象"隙間"から降り注ぐもの。
空が見えるほど灰色雲が割れるのは一箇所だけだが、時折、太陽光が雲の隙間から降り注ぐことがある。
フランスはパリ大学に在籍する高名な碩学であるキュリー博士の研究により、この陽光には人体及び肌に有害な紫外線なる光線が混ざっているとされ、特に陽光が降り注ぐ数の多いとされるロンドンの女性たちはこれに晒されることを忌み嫌っている。

●大協会(ファウンデーション)

合衆国における叡智の象徴。元は、リンカーン総統と相対する大学教授をはじめとする知識層による反体制的結社であったという。やがてリンカーン総統が死亡し、新大陸に合衆国が成立したことで結社は目的を果たし、以後は合衆国の繁栄を導くための組織へと変わっていった。
現在における大協会は、合衆国全土の碩学たちを統括する知識の園である。多くの碩学たちを擁することから、碩学協会との類似性を指摘する者もいる。

●ロス・アラモス

合衆国政府内務省管轄の科学局。一般的にはロス・アラモス研究所と呼ばれる。
管轄は内務省だが、実質的には陸軍及び空軍の研究局である。軍事利用を目的とした各種先端科学を専門としており、機動要塞などの機関兵器関連の他にも、サイバネティクス、光学兵器、新型爆弾なども研究中であるという。

●《西インド会社》

別名は「碩学協会」という。発祥は大英帝国であるとされるが、主にカダスの碩学たちを管理する、知識の園、叡智集う厳かな組織である。秘密結社、特に英国では犯罪結社であるという噂もある。
合衆国においても協会の支部は存在し、NYマンハッタンにも存在していた。
この組織を統べる人物は明らかにされていない。

●《十碩学》

カダス北央帝国が発行する世界最高の碩学たちの称号。
北央帝国だけでなく、全世界の人類と文明に貢献を果たしたとされる偉大なる10名の碩学たち。カダス地方における2大有力者である北央帝国皇帝と王侯連合皇帝が共同で宣言することにより、初めて称号が成立する。
人々からは聖人のように敬われ、合衆国を含む世界じゅうの国家は彼らを最高位の貴族や高官として迎え入れる。バイロンやス

ティーブンソン、ダーウィンなど、欧米からカダスへと渡った天賦の才を持つ碩学たちに与えられることが多いが、現在ではカダス人の割合が増加した。

性質上、機関（エンジン）や工業に関わる碩学へ与えられることが多い称号であり、哲学や心理学の分野ならばまず授与されることはない。たとえば初代《精神公》メスメルから数えて4代目の《精神公》ユングに至るまで、多大な功績を残しながらも《十碩学》に列せされることは現在まで一度もない。

〜初代の《十碩学》たち〜
第1位：《蒸気王》バベッジ
第2位：《大数式》バイロン
第3位：《機関王》スティーブンソン
第4位：《博物王》ダーウィン
第5位：《鋼博士》ルクレール
第6位：《万能王》ダ・ヴィンチ
第7位：《大司書》カーター
第8位：《司祭》カサス
第9位：《探索姫》ローラ
第10位：《海洋公》フルトン

※後に《探索姫》ローラは、2代目の《大司書》を継いでいるが、その1週間後に失踪したため、公式記録としての《大司書》には数えられていない。

〜1907年現在の《十碩学》たち〜
第1位：《蒸気王》現在空席
第2位：《大数式》ローゼンクロイツ（2代目）
第3位：《機関の女王》エイダ（3代目）
第4位：《博物王》ダーウィン（継続中）
第5位：《鋼博士》クタート（3代目）
第6位：《万能王》ダ・ヴィンチ（継続中）
第7位：《大司書》テイラー（4代目）
第8位：《司祭》現在空席
第9位：《探索公》現在空席
第10位：《海洋公》ミゲール（2代目）

〜その他の有力な碩学たち〜
《精神公》メスメル（初代）
《精神公》ユング（4代目、現在）
《博物公》ウォレス（失踪）
《電気王》テスラ
《十字騎士》ニーチェ（失踪）
《物語る貴公子》キャロル

●R・カーター

偉大なる《十碩学》の第7位《大司書》の初代称号を有していた男性。

チャールズ・バベッジやローラ・ネーデルマンと共に、史上初めてカダス地方へと入ったザ・ファーストのひとりである。合衆国出身で、博物学者とも神秘学者とも言われている。その素性は謎に包まれており、銀の鍵なる存在の手がかりを求めて訪れたとも噂されているが、銀の鍵が何を指すのかは不明である。

現在は"消息不明"であり、生きていれば齢100歳を越すだろう。

●ローラ・ネーデルマン

偉大なる《十碩学》の第9位《探索姫》の初代称号を有していた女性。

文化人類学者。正しくはローラ・ジョサイア・ネーデルマン。齢15にしてバベッジやカーターと共にカダスを訪れた才媛であった。時の北央帝国皇帝ヒュブリスの拡大政策に反抗し、姿を消したとも《皇帝家》の策謀によって命を落としたとも噂されたが、いずれの噂も正式な記録には残されていない。

バベッジをはじめ多くの偉人たちから求愛を受けたとも、彼女を目にしたすべての人間に愛された（男女としてではなく人間として）誠実で魅力的な、誇り高き人物だったと言われている。

●ザ・ファースト

史上初めてカダス地方へと足を踏み入れた、R・カーター、チャールズ・バベッジ、ローラ・ネーデルマンの3名を指す尊称。

およそ2000年の歴史を有しながらもこれまで世界との関わりを有していなかったカダス北央帝国をはじめとするカダス人国家群と、既存の世界との橋渡しを行った偉人たちである。

●ホルヘ・ルイス・ボルヘス

天才博物学者。数多くの碩学と共にカダス地方を訪れたひとりだったが、授与されるはずだった《博物王》の称号を自ら辞退し、故郷アルゼンチンへと帰った。

竜や妖精などの幻想生物についての著書を残した。カダスにおける賤民種プセール人こそが北央帝国を成立させた人々であるとの論説を残したとも言われるが、こちらは正式な記録には残されておらず、少部数のみ発行された書が帝立図書館に保存されているという噂が残るのみである。勿論、ほぼすべての北央帝国臣民が論説どころかその書の存在すら知らないという。

●アルフレッド・ウォレス

碩学。博物学者にして生物学者。《博物公》の称号を有した。

在野の研究者の出身でありながら次代の《博物王》の座に相応しいと評された若き天才碩学であった。しかし、数十年前の《博物王》による"進化論"発表の直後、心理・人格・風貌・理論のすべてが豹変し、社会から姿を消した。

ある種の社会の暗がりに於いては、その後、彼は結社《西インド会社》の幹部となり、何かしらの研究を行ったとされている。一切の証拠は存在しないものの、近年、試験的敷設が進められている共通規格のエネルギー／情報ネットワークこそが彼の研究成果であるとする説もまことしやかに存在する。

●ウォレス情報網

別名はシステム・ウォレス。

近年、北央帝国での実験稼働の後に英国や合衆国などの先進各国で試験的敷設が進められている共通規格のエネルギー／情報ネットワークである。行政情報サービスをはじめとして、生活、経済、娯楽、等々のさまざまな情報の革命的取り扱いと伝達が成されるものと予想されている。

北央帝国帝都にて半年の実験稼働が行われていたが、実に2ヶ月足らずの敷設工事によって大英帝国首都ロンドン全土で試験稼働が行われることとなった。1908年時点で本格的な試験稼働が行われているのは、ロンドンをはじめ、パリ、バグダッド、香港、シアトル、シャッガイ等。

史実における現代に生きるあなた方であれば、ワールド・ワイド・ウェブや光ケーブルと、それらと同時に併せて敷設される送電線等々を想定すれば、最も近似のイメージを得られるだろう。

●幻異（シャドウ）

1908年より世界各地の大都市で密やかに観測されている現象。

主に夜、ゆらめく幻が浮かび上がる——というもので、各国の警察組織や諜報組織、調査機関による捜査・観測結果は公表されてはおらず、市民レベルではせいぜいがタブロイド紙の上で踊る噂で留まっている。

幻は、おとぎ話に登場する妖精などによく似た姿であるという。

空に隙間のない小都市には出現せず、ウォレス情報網が試験敷設されていない都市にも出現しないというが、真偽は不明。

●黄金瞳

その名の通り、黄金色の瞳。

カダス北央帝国の皇帝血族に多く見受けられる特徴である。碩学協会及び北央帝国・皇帝家はこの瞳の所有者をきわめて重要視し、

時に監視し、時に保護しているという。
多くの場合は遺伝として発現するが、何らかの条件によって突如として発現させてしまう者もいる。協会も帝国も、特に後者のものを重視する。
この瞳は幾多の伝説を有している。
すべてを見抜くであるとか、すべての想いを受け止めるであるとか。
事実としてのみ述べるのであれば、この瞳を有した者の多くは、大型の機関に接続された大計算機にも匹敵する超人的な情報処理能力を得る。過去にも数度、黄金瞳の持ち主が大機関（メガ・エンジン）級の機関機械（エンジン・マシン）に接続し、膨大な数式を瞬時に解き、起動に幾百年を有するとされた超大な碩学機械を起動させることに成功している。

●《エメラルド・タブレット》

かつて世界に在ったすべての叡智が集うとされる存在。
錬金術すべての知識の奥義が記録されていると言われ、これを解き明かし、乗り越えることが《西インド会社》の究極目的であるというが、事実は不明。

●緑の石

碩学協会こと秘密結社《西インド会社》が実験に用いる緑色の結晶体。元は本のかたちを成していたとされる。本であった頃のものは《緑色秘本》または《エメラルド・タブレット》と呼称される。
さまざまな効果をもたらすとされるが、真偽は不明。

●メスメル学

結社《西インド会社》の一員であった天才碩学メスメルによって確立された学問。
別名は心理学という。
人間の心理、精神の全容を解き明かすための学問であり、現在では結社碩学フロイトによって継承されている。

●史実の書

人類が終焉までに辿るすべての歴史が記されているという、伝説でのみ存在が伝えられている書。別名を《三世の書》という。
結社《西インド会社》はこの書のラテン語版を有しており、解読を進めることで、歴史の裏で暗躍する術をここから学び取ったと言われている。しかし、1907年現在では書と現実との齟齬が数多く見られるという。
この書によれば、ボルヘス卿はもっと先の次代に生まれる人物であったし、他にも《物語る姫》メアリ・シェリーのように、書に記された“予定”よりも後に生まれている人物も確認されているのだとか。
この書による未来像では、地球では蒸気機関文明による爆発的発達が起こらずに、2度の世界大戦の後に電力文明が築かれるという。

●外典の書

史実の書における黙示録。
ひとつの史実を記述し続ける史実の書の理念とは異なり、さまざまな世界、さまざまな現在や明日の終わりが記されている。

●現象数式

かつての閉鎖都市インガノックで生み出されたとされる力。
あるはずのない現象を引き起こす。
1903年のインガノックで発生した《復活》と呼ばれる異常現象の理由と原因を研究していた大公爵アステアによって発見された怪理論であり、ある種の《数式》を真に理解し、脳裏に描くことで、おとぎ話に登場する“魔法”にも似たさまざまな現象を操ることができるとされた。

本来は大機関（メガ・エンジン）級の大計算機（オルディナトゥール）を用いた実験でのみ実現が成されるというが、都市インガノックにおける“空白の2年もしくは10年”に於いては、脳内変異を起こした一部の人間たちが“おとぎ話の魔法使いのように”個人の技術もしくは能力として活用したという秘匿記録の存在が囁かれている。
これらの能力者たちは、熟達すれば火器を超える破壊の炎を操ることも、欠損した肉体を治癒することさえ可能となるが、脳内変異を引き起こしていても、尚、複雑で奇怪な現象数式であるアステア理論を習得できる人間はごく一部であり、都市インガノック人口の1%にさえ満たなかったという。
——以上が、合衆国をはじめとする大国の中枢や諜報組織で密かに伝えられる現象数式の知識だが、ある筋の情報では、そもそも現象数式の大規模実験こそがNY及びインガノックの惨事を引き起こしたものと認識されている。ならば、現象数式を生み出したのはインガノックのアステア大公爵であるはずがない。
疑問の回答となる説も存在する。大公爵に現象数式の知識を与えたのは、各国中枢から恐れられる巨大結社《西インド会社》の盟主であるとも、世界最高の頭脳のひとりとして讃えられた大碩学ロード・エジソンであったともいう説である。こちらの説は、世界の、ある種の暗がりに於いては主流の見解となっている。

●鐘

先進各国の諜報組織や一部碩学の間で語られる存在。
現象数式の演算を“肩代わり”するものとして噂される、特殊な碩学機械。開発者不明。開発組織不明。脳変異も大機関もなく現象数式を発生させられる。
鐘と呼ばれるのは、形状の他に、ある種の共鳴を思わせる現象を引き起こすため。
1890年当時、如何なる理由かトレヴァータワー内でこの鐘の開発及び外部への移送が目撃されたという情報がある。

●誓約者（カヴェナンター）

先進各国の諜報組織や一部碩学の間で語られる存在。
鐘の演算を受容する人間。共鳴者とも呼ばれる。
インガノックにおける脳変異型の現象数式使いの用いた力の多彩さとは異なり、誓約者たちの得られる能力は常にひとつであるという。

スチームパンク・シリーズ年表

1822年
・英国北海、探索者R・カーターがカダス地方へと通じる《門の位相》を発見。南極大陸と中央アジアにおいても同様の位相が発見される
・R・カーター、チャールズ・バベッジ、ローラ・ネーデルマン、カダスへ到達
・大英帝国による北海完全封鎖

1823年
・R・カーター、カダス地方『発見』の詳細を全世界に公開

1825年
・大英帝国、カダス地方最大の国家である北央帝国との条約を締結
・ロンドン、パリ、北京にて異常現象の報告相次ぐ（※1）

1826年
・世界各国の碩学がカダス北央帝国へと渡航
・カダス地方に伝わる進歩的蒸気機関技術、世界的碩学たちの知識と発想を得て飛躍的な発展と変化を始める。事実上の『機関革命』『第2次産業革命』の開始

1827年
・カダス北央帝国、チャールズ・バベッジが超大型計算機《大階差機関》の開発を開始
・カダス北央皇帝ヒュブリスによる『第2次機関革命』宣言
・欧州各国及び合衆国、『第2次産業革命』の発生を共同宣言
・蒸気機関時代、空の灰色時代の幕開け

1833年
・《大階差機関》の完成により機関機械の開発量が爆発的に増大
・カダス北央帝国、人類社会に貢献した碩学を貴族とする『新貴族制度』を設立

1835年
・カダス辺境にて、ローラ・ネーデルマンとチャールズ・バベッジが消息不明に
・ダーウィン卿による『無実体古生物についての発言』と『カダスにおける旧支配者とドラゴンへの言及』が記録削除処分となる（※2）
・合衆国、大碩学エジソンが機関導力管の原理と設計図を公開。生活の機関化進む

1837年
・大英帝国、記事『機関導力管の量産に伴う生活と文明の機関化について』がTIMES上にて連載開始。各国中枢や碩学の間で話題となる
・カダス北央大陸、第1次カダス戦争勃発。北央帝国の大戦車軍団が大陸を席巻
・碩学詩人バイロンが『青空まで何マイル』を発表。物議を醸す

1840年
・カダス北央大陸、第1次カダス戦争終結。北央帝国の圧倒的勝利

1841年
・カダス北央帝国、辺境保護を目的とする拡大政策を開始。事実上の侵略行為として欧州各国から非難されるも、カダス地方の大国である王侯連合はこれを黙認

1848年
・カダス北央帝国、ラッダイト（機関打ち壊し）活動が頻発
・フランス、ナポレオン3世を中心とする2月革命の成功。第2共和制の成立

1849年
・第2共和制フランス、ナポレオン3世によるクーデター失敗。同時に第3ブルボン王朝が復古し、フランスの政体は王政へ

1850年
・欧州及び合衆国、大規模な犯罪組織抗争の陰で初の《白い男》目撃報告
・第3ブルボン王朝フランス、英国の碩学組織《西インド会社》との協力でマルセイユ湾上に試験的準環境型施設ガクトゥーンを建設
・カダス北央帝国、ラッダイト終了宣言

1859年
・カダス北央大陸、第2次カダス戦争勃発。北央帝国空軍の大規模制圧兵器『機動要塞』の完成と実戦投入が噂されるも帝国はこれを否定
・エジプト、スエズ機関運河の起工

1861年
・合衆国、南北分離戦争の開始
・合衆国、エジソン卿は北央帝国による身柄保護の申し入れを拒否
・エジプト、スエズ機関運河の完成

1863年
・カダス北央大陸、第2次カダス戦争の終結。北央帝国再びの圧倒的勝利
・合衆国、リンカーン大統領の『総統宣言』ことゲティスバーグ演説。リンカーン総統を頂点とした軍事政権が樹立。恐怖政治の台頭

1866年
・合衆国、リンカーン総統暗殺
・新大陸、南北分離戦争の終結。黒人奴隷制度の終結。南部連合の独立が先進各国に承認され、合衆国では軍事政権が瓦解。合衆国民主主義の復活

1869年
・極東、五稜郭戦争。カダス製大規模機関兵器が投入されたとの報道相次ぐ
・極東、東西分裂の開始

1877年
・オスマン機関帝国、ルーマニア独立を承認せず内戦状態に
・文明の全面的機関化に伴う海洋汚染が各国で問題に
・海運の衰退、流通の空輸化進む。飛行船・飛空艇時代の到来

1885年
・オスマン機関帝国、ルーマニア独立を条件付き承認
・カリブ海、南北新大陸の超国家的計画として海上拠点シャッガイの大規模改造計画が始動。主導国である合衆国と中南米各国に対して、カダス北央帝国は巨額の援助を保証する協定を締結
・合衆国、封鎖された新大陸西部で異常現象の目撃相次ぐ（※3）

1888年
・シン国、北シン機関事変。義和団による全国的なラッダイト（蒸気機関破壊）活動を鎮圧すべく、列強連合軍が大規模機関兵器を使用。死傷者数は計測不能

1889年
・カダス北央帝国、各地で第2次ラッダイト活動が発生するも半年で根絶
・合衆国、新大陸西部の封鎖解除

1891年
・キエフ郊外で異常現象の目撃相次ぐ
・エジプト、オスマン機関帝国への反発を表明した諸侯の暗殺相次ぐ。国際テロ組織《血塗られた舌》は「対価によって痛みを彼らに」と犯行を表明
・欧州、神聖都市ローマにて枢機卿数名が失踪

1892年
・全世界的（カダス地方含む）で海洋汚染が深刻化。通常船舶での長距離航行はほぼ不可能であると発表される
・エジプト、スエズ機関運河の閉鎖。海運の

終焉
・カダス辺境にてベヴェル戦役発生、3ヶ月で終結
・カダス王侯連合の都市インガノックにてアーコロジー都市計画が始動

1896年
・カダス北央帝国、皇帝家により小国ブリートの公女セルラを北央皇帝血族と認定
・カダス大辺境、砂漠大陸にて異常現象が数例確認される
・合衆国、犯罪組織抗争の陰で再度《白い男》の目撃報告

1900年
・大英帝国を中心とした先進的機関ゾスの実験が始動（※4）

1901年
・合衆国、ナショナル・アライド社が新たなコミック・ヒーローである『スーパーマン』のシリーズ発行を開始。子供たちを中心に人気を呼び歴史的規模の成功作に
・合衆国、《白い男》は政府と契約した超人（スーパーマン）だという噂がタブロイド各紙で書き立てられるも、政府報道官は「コミックの話は詳しくない」と一蹴

1902年
・カダス北央帝国宰相バイロン逝去
・カダス大辺境で《皇帝機》出現および墜落の機密情報が各国に伝わる
・カリブ海、洋上拠点シャッガイの重機関都市化が頓挫。原因は、バイロン卿逝去を理由とした北央帝国の協定破棄
・欧州、シュトレゴイカバール鉄塔爆発。《白い男》の姿を見たとの目撃情報あり
・合衆国東海岸にて、重機関都市ニューヨークが消失（12月25日）

1903年
・合衆国、コミック『スーパーマン』#25にて主人公クラーク・ケントがNY消失について「神も、私も、等しく無力だ」と言及。合衆国全土を巻き込んだ社会問題に
・大英帝国にて、メアリ・ウルストンクラフト・シェリーが小説『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメシュース』を出版
・カダス王侯連合の都市インガノックが《無限霧》に覆われ、世界から隔絶
・エイダ・ラブレイス・バイロン、カダス北央帝国第1執政官に就任
・カダス北央帝国と王侯連合、新たな同盟を締結

1904年
・カダス大辺境の砂漠都市ヴァルーシア、列強各国からの技術支援移民を受け入れ開始
・カダス王侯連合、新兵器開発に着手。帝国および連合、緊張状態に
・小説『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメシュース』がローマ教皇に激賞され、直後から欧州各地で舞台化
・都市インガノックを覆う《無限霧》の消失を確認（12月25日）
・世界の各主要都市、空の隙間の存在の報告が相次ぐ（12月25日以降）
・ローマ教皇による『太陽発言』が物議を醸す（12月31日）

1905年
・大英帝国、ゾス機関実験の頓挫（※5）
・大英帝国ロンドンにて《怪異》出現の噂が頻出
・カリブ海、洋上拠点シャッガイの中立都市化宣言と不可侵宣言を合衆国が承認

1906年
・欧州を中心に世界各地で『同時多発的な白昼夢』の報告が頻発（※6）
・大英帝国、ヴィクトリア女王崩御
・カダス北央帝国首都にて共通規格のエネルギー／情報ネットワークの実験稼働が開始
・カダスの都市インガノック、大英帝国マイクロフト査察団による上層調査を拒否
・カダス大辺境、複数の洋上にて巨大な不明物体が目撃される（※7）

1907年
・カダス大辺境、砂漠都市ヴァルーシア太守ハールートが北央帝国《機関姫》との婚約破棄を発表。北央帝国との進歩的条約締結は白紙状態に
・大英帝国、メアリ・クラリッサ・クリスティが絵本を少部数発行（※8）
・カダス大辺境の湖岸都市セラニアンにて大規模爆破テロ（※9）
・合衆国東海岸、廃墟都市ニューヨーク上空にも隙間が発生（12月25日）（※10）

1908年
・先進各国の協力により、ロンドン、パリ、キエフ、モスクワ、バグダッド、香港、シアトル、シャッガイ等の都市で共通規格のエネルギー／情報ネットワークの試験稼働が開始
・北央帝国アステア家の廃公子カルベルティ、公爵家を復興。成婚の噂も
・国際テロ組織《血塗られた舌》が壊滅
・第3ブルボン王朝フランス、マルセイユ付近にて《白い男》が目撃される
・世界の各主要都市にて《幻異》目撃の噂相次ぐ

1909年
・世界の各主要都市にて同時多発的に怪事件が発生

◆秘密結社《西インド会社》による付記◆
（要注意。この付記に書かれた事柄はすべて真偽不明であり、実証されていない）

※1
当時の結社記録によれば、ロンドン、パリ、北京にて時間と《史実の書》との『ずれ』が秘密裏に観測されている。観測報告に伴い、結社では《史実の書》の完全破棄と大目標変更が決定した。数年をかけて書の破棄が計画されたが書の80％は残り、1908年現在でも未だ完全破棄には成功していない。

※2
北央帝国、皇帝家による隠蔽工作。我ら《西インド会社》の指示による。

※3
新大陸西部辺境における異常現象の頻発。西部辺境からの情報は政府によって秘密裏に処理され、関連する公的記録もすべて政府によって抹消された。

※4
表向きは新型機関ゾス稼働実験として発表されている。実際には、大英帝国を中心としながらも我ら《西インド会社》や《黒騎士団》といった碩学結社、秘密結社も参加した先進的時間計算実験であった。正式名はゾシーク計画。
国家規模の超大型蒸気機関を複数連結利用した大計算は欧州では初のこと。

※5
すなわちゾシーク計画の頓挫を意味する。ほぼ同時に、英国王家（特にヴィクトリア女王）主導のシャルノス計画、別名アヴァロン計画が密かに再始動している。

※6
シャルノス計画の失敗を意味する。計画の最終段階に伴って広範囲（ほぼ惑星全域）に発生した『一時的な時間の喪失と停止』について、感受性の高いごく一部の人間は白昼夢であると誤認している。（正確には、誤認を導くべく、我ら結社が大規模なメスメル式心理迷彩処理を施している）

※7
由来及び性質不明の巨大物体。形態は中世期の柱時計に酷似。装飾は古代カダス遺跡の一部遺物に近似。全長数マイル～数十マイル級の物体が複数個、突如としてセレナリア海に出現するも、半年後に消失。
結社最高幹部級の機密情報によれば《チクタクマンの大機関時計》もしくは《終末時計》なる名称を与えられていたが、詳細は不明。

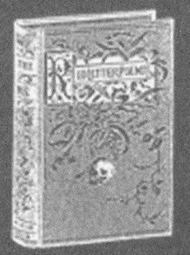
※8
失われたはずのアルソフォカス文献（アルソフォカスの書）を想起させる記述があるとして、カダス北央帝国の機密博物学会では主題のひとつとして扱われている。

※9
我ら《西インド会社》による工作。かつての最高位エージェントであるM氏を撃破目標とした下部組織《パヴァリア啓明結社》による破壊工作であった。

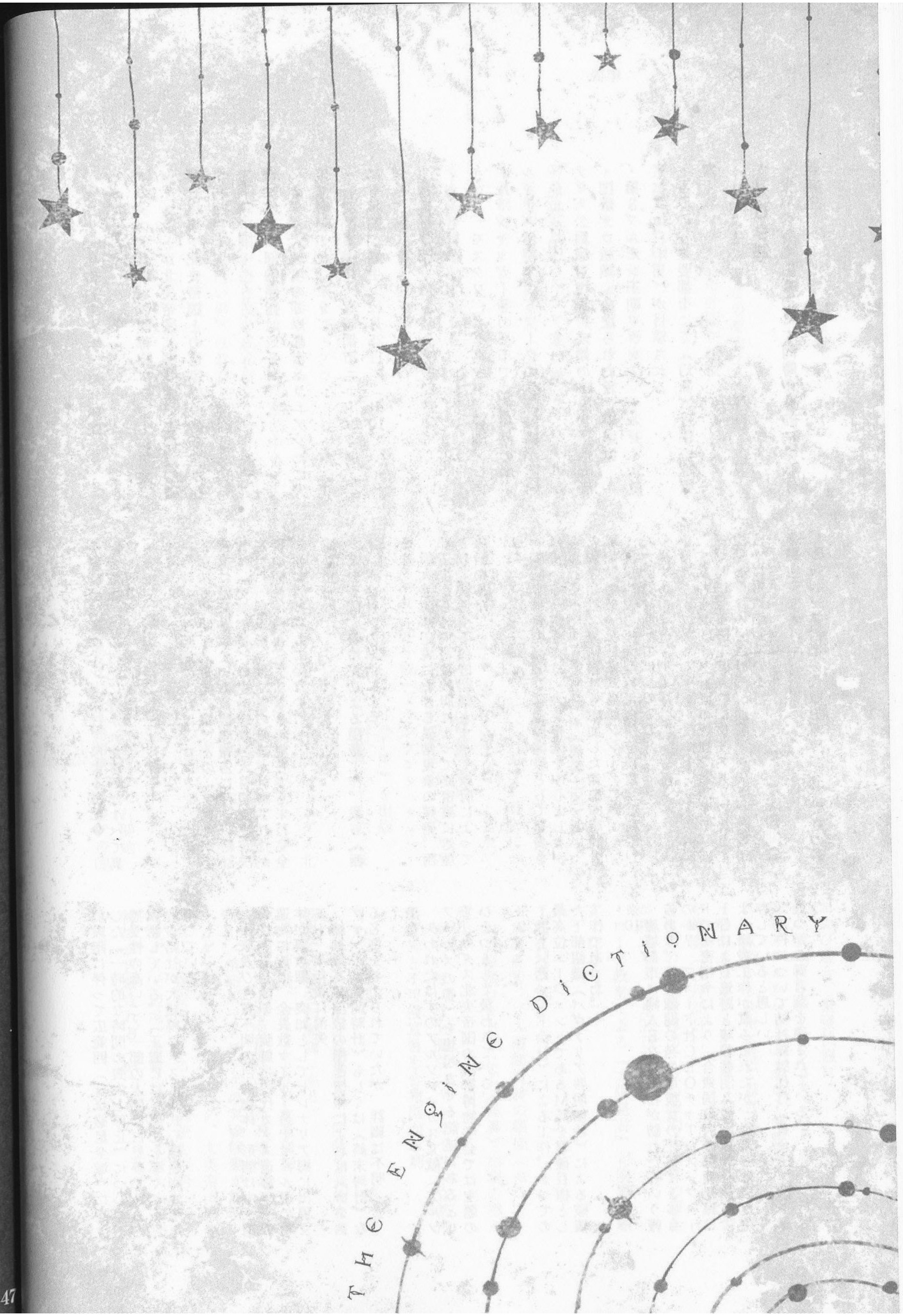
※10
廃墟都市に婦人Eなる人物が訪れたという報告あり。空の隙間の発生は彼女の仕業によるものか？　フォード社CEOチャールズ・フォードの秘密指令により、合衆国政府の諜報組織CIGによる追跡と暗殺教団《血塗られた舌》による暗殺工作が試みられたが、婦人Eは未だ生存していると思しい。
本件について結社総帥代行《黄金王》閣下は幾つかの御言葉を残されている。

紫影のソナーニル　～夢幻彷徨～

桜井光
イラスト／AKIRA



Liar-soft



※Ｃａｕｔｉｏｎ!!※

これより先の頁は『紫影のソナーニル　Ｒｅｆｒａｉｎ』本編読了後、『ＥＸシナリオ』開始前にお読みいただくと一層お楽しみいただけます。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ｉ）

一九〇八年（たぶん）。

青い空の日。

きのうと同じ、空を旅している日。

きのうと同じ、一輛だけの地下鉄で雲の上を飛んでる日。

地下世界から飛び出て、一輛だけの地下鉄はずっと空を駆け続けてる。

まだ、一度も降りてない。

きょうは……。

日記を書いたらどうだい、とか、Ａに言われた。

日記。



そんなのあたし書いたことない。

そもそも、あたし、字を書いたことってあったんだっけ。

わかんない。

わかんないから、そんなのできないよって言ったんだけど。

「それはおかしい」

「きみにはすべてが許されている」

「夢見ることも、どこかへ行くことも、空見ることも、きみはできるのだから」

「日々を記すことも、できる」

とか、よくわかんないことをＡが言い続けるので、ああ

もーわかったよ、書いてみるよって言って。
言っちゃったんだよね。あーあ、もう。

で、今。これを書いてる。

可愛い日記帳を貰ったんだ。Aから。
装飾が沢山ついてて、ちっちゃい錠前もついてある、ちょっと厚みのある、でも小さい手帳みたいな。日記帳。
鉛筆と字消しも貰った。
書き方なんてわかんないよって思ったけど、持ったら、できた。なんでだろ？

きょうは空を見てた日。
うん。きょうも空、見てたよ。

日記。一日の記録。
きょうは、どんな日だったっけ？

きょうはAが分厚くて大きい百科事典をあたしに読み聞かせてくれた日。
最初は、もー、ほんとに眠いだけだったけど、だんだん慣れてきた気がする。面白いよ、機械の話とか、昔の合衆国の歴史の話とか。
広げてくれる大きな百科事典には、だいたい難しいことが書いてあるけど、でも、写真や絵がついてることも多くて、面白いんだ。うん。
絵や写真を見て、これはなんだろ？　て思ってると、Aが説明してくれる。

きょうは、いつか聞いたお船の話の続きを聞いたっけ。
メイフラワー号、とか？
うん。そう。お船の話のつづきを聞いた日。

それと——

クラムチャウダーを食べた日。うん。おいしかった。
シフォンケーキを食べた日。おいしいよね。

えーっと……。
きょうは日記を書き始めた日。
今これを書いてる日。

んー……。

うーん……。
なんか、書きづらい。もっとすらすら書きたいな。

「思ったことをそのまま書けばいい」ってAは言うけど、
ほんとにこれでいいのかな。
マオに聞いてみようかな。ルチアーノより、マオのほうがいいよね。
あたしの……あたしと、Aの、この一輛だけの地下鉄にマオが顔を出すようになって、どのくらいだろ。まだあんまり経ってないよね？

あ。

ああ、そっか！
日記つけておくと、そういうの、ちゃんとわかるんだ。
いちいちAにきかなくても。チャッと鍵開けて、ぱっと開いて、わかるんだ。

日記、いいかもしれない。
うん。いいよね。

明日もつけよっと！
明日はもっとちゃんと書けるといいな。

鍵、どこに隠しておこう……。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅱ）

一九〇八年（たぶん）。
きょうも、青い空の日。
きょうはねむくてあんまり日記書けないかも知れない……。
だからきょうは、楽しいことをひとつだけ！
ねむいから……。
日記。きょうという日を記すもの。A、そう言ってた。
だから、朝起きてから寝るまでをちゃんと書こうと思ったんだけど…（何があったか思い出す時も便利だと、思うし）



猫のマオ。ひとのマオ。ネコビトのマオ。
ニャアってひさしぶりに言ってたのは、なんでだろ。
もうここは紫色の空じゃないけど、マオは遊びに来てくれる。
夕方くらいかな。窓を見てたら、いつの間にか地下鉄の「部屋」の中にいた。
きみが　だからだよってAは言うけど、相変わらず、よくわからない。
あたしが　な訳ないのにね。
マオはなんだかとっても機嫌がよくて、だからあたしもにこにこしてて。

Aはいつもと変わらないけど。
夕食も一緒に。泊まっていくのかなって思ったけど、女の子同士で泊まる時は男はいちゃいけないから、ってマオは言ってた。Aを運転室とかに閉じ込めておけばいいのかな。
マオと、寝る前までゲームを遊んだ。
すごろくみたいな、でも、怪物とかいっぱい出てくる、面白いゲーム。
チェスみたいに盤を使うんだけど、すっごく大きな盤面で。
マオはあっちこっち飛び回るし、Aはずっとあたしの駒（確か職業はお医者さんだったかな）の近くにいて、ぜんぜん息合ってなくて危なかったけど、なんとか解決（クリア）できた！
「もっと多人数で挑むと、難易度が上がるよ」って、A。
「ひひひ。今度はルシャも連れてこようか、ニャーゴ？」マオはそう言って笑ってた。あと、ニャーゴって言った。
とっても楽しかったから、みんなで遊びたいな。
もっとたくさん、いろんなひとと……。
うう。
ねむい
ね む　い
……Aが、もう寝ろって　うる　さい
湯冷めなんてしないよ……。
もうちょっとだけ、きょうの日記。まだ、きょうだし。
とっても楽しかった！

楽しかったから、また、遊びたい。
うん。せめてこれだけは、書いておかないと。
あれ、おなじこと、二回書いてる……？
えっと、もう寝る。明日は……。
明日はお部屋の掃除をする日。しなくていいの？　って訊いたら、A、「きみが望むなら」って。よく　わかんない　けど
明日　また
にっ　き　かく

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅲ）

一九〇八年（たぶん）。
青い空の日。
朝。フレンチトーストっていうのを食べた。
甘くてやわやわで、おいしかった。
昼。なんとかっていう南米？　のサンドイッチみたいなもの（ここ明日Aに訊いて書き足し！）を食べた。
辛くて、おいしかった。
おやつ。チョコレート、食べた。
甘くて苦くて、うん。おいしかった。
夜。ボルシチっていう、寒い国の料理を食べた。



なんだかすごい色だったけど、あついスープはじんと染み渡って、とってもおいしかった。また食べたいな。
おわり。
あれ。
朝から夜まで書いたつもりだけど、なんか、短い。
なんでだろ。
あっ　食べ物のことしか書いてない！
おかしいな、朝から夜までって思ったのに、うーん……。
食べ物のことしか憶えてないわけじゃないんだけど、ど

こまで書いたらいいんだろ？
トイレに行ったとかお風呂入ったとかは、いいよね。
でも今日は、誰も遊びに来てないし、外にも出てないし、
うーん。

ん？

……うーんうーんって唸ってたら、Ａが向こうから「印象に残ったことを記せばいいんだよ」って言ってくれた。
（Ａがちょっと離れたとこにいるのは、近くにいると中身を見られるから。日記の）

んー。
朝起きてから、夜寝るまでじゃなくてもいいのかな。

印象に残ったこと、かぁ。
何か、きょうは、あったかな？
きょう、食事に、はじめての料理が多かったことと

……。

……うん。
うん。ある。
あったよ。
きょうは、空に面白いものが見えたんだ。
大きなもの。
ぶおん、ぶおん、って羽ばたくたびに風の音がして。
トカゲみたいな、なんだろ、ウロコのいっぱいある子が飛んでた。
子っていうにはちょっと大きいかな。具体的にどれくらいの大きさなのかはよくわかんない。ちょうど、この一輛だけの地下鉄と同じくらいの高さを飛んでたんだと思う。
窓からちょうど顔が見えた。目が合ったんだよ。
やさしい目をしてた。
瞳の色は、えっと、金色だったかな。

Ａに言ったら「そんなものが見えるはずはない」、だってさ。
あたしには、見えたのにな。

窓開けて、おーい、って言ったら、グオーって鳴いてた。
（なんて言ってたんだろう？）

あの子、なんなんだろ？

今度、絵に描いて、Ａに訊いてみようっと。
絵を描くのって、あたし、したことないけど……。
鉛筆でいいんだよね、この日記帳に描いてみようかな。

でも、きょうはねむいから、今度ね。今度。
Ａがなんとなく近付いてきてる気がする……寝ろってことかな……。

うん。寝よう。

きょうは、これでいいかな。おやすみなさい。
あの子にまた会えたら、名前、きいてみようかな。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅳ）

一九〇八年（たぶん）。
晴れ後、くもり。

印象に残ったこと、えっと……。

きのう見た子のことをAが夕食の後に話してくれた。
話してくれたっていうか――

Aはまたあの分厚くて重そうで大きな百科事典を広げて、あたしに何回か確認した。最初に見せられたのは、鳥。
鳥のページだと思う。
でも、鳥じゃないんだよね。ウロコないし。
だから、ううん、違うよってあたしは言った。



鳥って、毛でふさふさしてる。
でも、その生き物は、のっぺりしてた。
毛なんて一本も生えてなくて、つるつる。のっぺり。
次に見せられたのは、見たことのない不思議な生き物。体の表面がのっぺりしてて、鳥っぽいけど鳥じゃない生き物。
くちばしが長くて、でも、鳥じゃない。
似てないこともないけど、違うよってあたしは言った。
それから、最後に開いたページを見て、あたしは「似てる」って言った。
うん。いちばん似てたから。

「竜は実在しない。きみはこれを見てはいないよ」って、Aは言うんだけど……。
でも、ひとつ前に見せてもらったのも、大昔の生き物で、今はもう一匹もいないっていう生き物だったんだよ。なら、いない生き物をあたしは見たのかも知れない、ってAは考えたってこと……になるんじゃないかな。
それならさ。
いないはずのドラゴン？　をあたしが見たってことも、あるんじゃないのかな。

だって、声まで聞こえた。
羽ばたく音は強く吹きすさぶ風そっくりで。
目も合ったし。
金色の目。
あっ、そうそう。目。瞳のことを言ったらAってば、びっくりしてた。あたしのほうを見て……るのはいつも通りだけど、なんだか、いつもと違う感じ。
あたしを見ながら、あたしじゃないものを見てるような、そんな感じ？

「本当かい？」って。言われたけど。
嘘ついてるって思ってるのかな。なんで、あたしが嘘つくんだろうね。変なA。
すぐ謝ってくれたから、許したげるけど。
あ。そういえば……。
昼間、ちょっと、眠くなって……。
お昼寝っていうか、ううん、違うんだよ。ちょっとうたたねしただけ。
そう、うたたね。
うん。うたたねした時に、ね。

あの子の声をまた聞いた気がする。グオーって。

慌てて起きて窓の外見ても、何も、誰もいなかったんだけど……。

あの子、近くに来てたのかな。
あたしたちの近くを飛んでるのかな。
また来てくれないかな。そうしたら、今度は、Aにも

――

あー！

いま、Aに覗かれた！
日記覗かれてた！

「ほら、あれ見て、ときみがきのう言った時にも僕は窓の外を見たが、何も見えなかったよ」だって!!
書いてる最中なのに読まれてる！
読んでないって言ってる！　でも読んでる絶対！

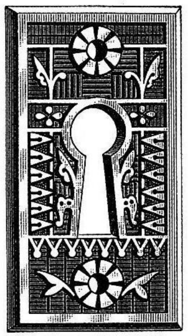
きょうの日記これでおしまい！

Aに見られない方法考えないと！

おやすみ！

◆ヒュプノスの声

《誰だ？》
《誰だ、お前は》
《そこで》
《見ている、お前は》
《誰だ》
《オスカルトか？》
《いや》
《これは、サニドの瞳に似て――》

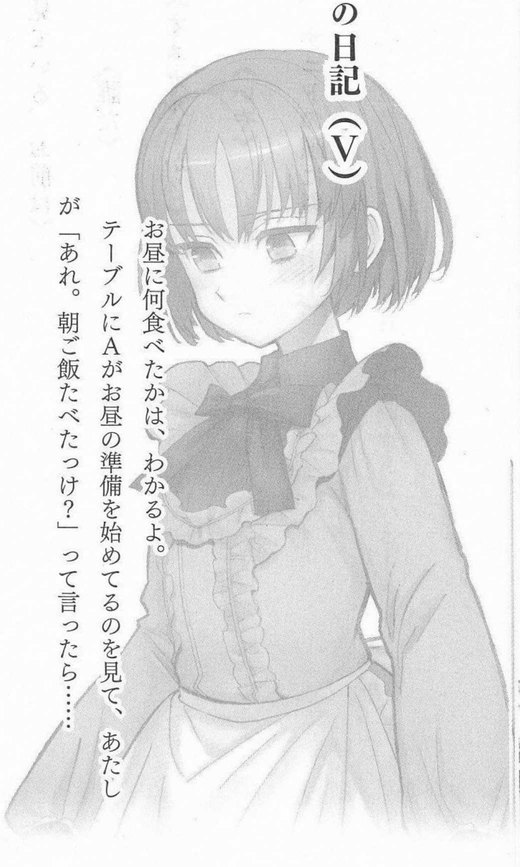


◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（V）

一九〇八年（たぶん）。
空の色は……どんな風だったっけ。

あんまり憶えてない。
ちゃんと、空、っていうか、窓をそもそも見なかった気がする。きょうは。

最初はさ？
Aに見られないように日記書くにはどうしたらいいか、って考えてた。
朝からお昼まではそう。
何食べたかもよくおぼえてないや。えっと。甘いもの？たべた？



お昼に何食べたかは、わかるよ。
テーブルにAがお昼の準備を始めてるのを見て、あたしが「あれ。朝ご飯たべたっけ？」って言ったら……
Aがほんのちょっとだけ驚いた感じで。
あっ。てあたしは思った。

だめだよね。
だめだよ。せっかくさ、大変かどうかはよくわかんないけど、作って（作ってるのかな、あれ？）くれてるのに、何食べたかもぼんやりなんて。だめだよ。

だから、お昼はちゃんと食べた。
極東っていうんだっけ。ずっとずっと東の、それって逆

を返せばずっと西ってことらしいんだけど、ほら、世界って、丸いから。ボールみたいに。楕円なんだっけ。うん。
そこのお料理。オサシミっていうんだったかな。
生のお魚と、ライスと。サラダ？みたいなのと……。

あと、スープ。
お豆のスープなんだって。
赤っぽい茶色い色の、えーっと、ミ……。

ミス？

そう、確かそう、ミス・スープ。
ふふ。変なの、どんなひとだろうねそれ。なんだっけ。スープ。

おいしかったよ。今まで食べたことのない感じ。
生のお魚はぐにぐにしてたけど、甘い感じで、黒いさらっとしたソースにちょっとつけると、ライスにあうの。

あ。でも、ワサビはだめだよ。
あれ、つーんっ、てなる。

うん。
おいしかったんだけど。
でも、その後ね。
お昼の後……。
あたし、多分、眠ったんだと思う。
おなかいっぱいになって、眠くなって、ああ、だめ、まだちゃんと日記の対策考えきれてないし、寝ちゃダメ、とか思いながら、最近、あんまり外に出てないな、とか、思いながら――

眠ったんだと思う。

Aの声が聞こえた気がしたけど、なんて言ってたのかはわからない。あたしは、何か、こたえたと思う。こたえないといけない、ってなぜか思ったから。でも、内容、おぼ

えてない。何て言ったんだろう。
ともかく、さ。あたしは、きっとたぶん、眠って。それで。

目が覚めたら　ここ　にいた。

日記にきょうの空の色は書けない。だって、あたしが目覚めたのは、いつなのか、わからないから。きょうのつづき？　それとも、あしたのきょう？　いつもなら、Ａが何か言ってくれる。でも。

Ａがいない。
あたし、ここには、あたしひとりしかいないから。

一輌だけの地下鉄の中じゃない。「部屋」の中じゃない。氷みたいな、でも、触ってもそんなに冷たくない、きらきらした透き通る結晶が、たくさんあるところ。

見たことのない場所。
今も、あたし、ここにいる。ひとりで。

……慌てたよ。慌てたけど、落ち着かないと。

なんで、日記帳とか、鉛筆とか字消しがあるんだろ。足下に落ちてた。Ａが、あたしと日記帳をここに捨てていった、なんてことは、ない。ないよ。ない。絶対。
それはわかるんだ。だから、あたしは、まずは落ち着こうって思って。
だから、こうして日記を書いてる。

そもそも、今、夕方なのかな。夜なのかな。
それとも、もう朝？　その次の夜？？
空は、まわりと同じ感じ。白っぽい灰色の、ぼんやりしたもやもやがあって、きらきらしてて。地下世界の空じゃない。あたしが見た、本物の空とも違う。

ここ、どこだろうね。

あ。

今、どこかで、グオーって声が聞こえた気がする。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅵ）

一九〇八年？
もやもやで白い空の日？

変な夢をみた。

……夢をみた、ような気がする日。
あたし、きのうの日記になんて書いてたんだろう。
やっぱり。白いもやもやで、結晶みたいな氷みたいなものがずんずん地面に突き立ってる場所に、あたし、いたんだ。
「そういう夢をみたのかい」とか、Aは言うんだけど……。

夢だったのかな。



日記にも、ほら、書いてあるのに。
夢？　あたしの夢なのかな。ほんとに？

Aの話だと、あたし、きのうの午後から眠っちゃって、きょうになるまで起きなかったんだってさ。ぜんぜん記憶にないけど、寝ちゃってたなら憶えてることなんてある訳ないもんね。
そもそも！
ずーっと寝てたなら、きのうの日記なんていつ書いたのさ！

……って、Aには言ったよ。
言ったけど、ダメだった。

Aに見られないように、ベッドの中で毛布の下に隠れて日記をつけようかな、って独り言を（きのうの午前中に）ぶつぶつ呟いてたのを聞かれてたみたい。「そういえばもぞもぞしていたね」だって。なにそれ。

うーん。
日記つけたのは、よく、おぼえてないんだけど。

白いもやもやときらきらの結晶の場所にいたのは憶えてる。

いたよ。うん。あたし、誰かに会ったような気がする。
顔も格好も、よくわからない、あの場所と同じでもやもやした感じのひとだった。男のひとか、女のひとかも、ううん、わかんない。まず、もやもやの向こうから赤くてきらきらの光があたしの胸元を照らして——

別に、なんともなかったんだ。ただの光だよ。

Aに百科事典で見せて貰った、投光器っていうの？

機関式（エンジン）投光器とかいうやつ。あれって、光を絞って、細い帯みたいにすることができるんだよ。そうそう。あんな感じで、赤くて金色の光が、あたしの胸元にあたってた。
うん。でも、別に、どうってこともなくて。

なんだろ？　って思ったら……。
そのひとがもやの向こうから出てきた。
出てきたっていうか、いつの間にかあたしの前にいた。
そんな気がする。

「これは驚いた」
「夢見るひとでもない　が、なぜ、こんなところにいるのかな」
そんな感じのことを言ってた。気がする。
あたしが　って、そのひとも言ってた。Aみたいに。
そんな気がする。
そんなわけないのにね。

そのひとは、いろんな話をしてた。気がする。
……気がするばっかり！

いろんな話を聞いた、ような……。
頭の中ももやもやしてて、ちょっと、自信がない。
Aは夢だよって言い切ってるし。もう！
もやもやだけど、憶えてることだけ、ちょっと書いておこう。
うん。ええっと……。
意味とか、ぜんぜん、わかんないんだけど。いいよね。

・旅するときは気をつけて
・黄色い卵の話（これ、お話の後にもらったような？）（今、どこにもないんだけど）
・ここは秘密の場所だから、知らないひとには言ってはいけない（書きながらこれ思い出しちゃった…。Aはいいよね。知らないひとじゃないもんね）
・他のひとはここにはいない。もう、ずっとずっと前に消えてしまった。ここも、本当は、消えてしまって存在していない
・でもあたしが　　だから偶然見られた（また……）

こんな感じの話をされた。
それと、ずいぶん、親切にしてくれたような。気がする。
うう。気がするばっかり……。

うーん。夢じゃ、ないよね。

はっきりは言えない。憶えてる、って言い切るのもちょっと無理。
でも、わかんないけど、あのひとには会った気がするし、どこかでやっぱりグオーって声も聞いた気がする。うん。

明日、また、Aと話してみようかな。
あんな風に夢って言い切るのも、なんか、変だし。変だ。
そういえば、A、明日はどこかに停車するって言ってたけど……。

どこだろ。
白くてもやもやの場所じゃ、ないよね？

◆Aの日記（I）

僕は、自己を述懐しない。

近頃、リリィが日記というものを付けているのは認識している。

それ自体は問題がない。むしろ、好ましいと言えるだろう。

彼女はその〈生まれ〉から、自己の記憶と過去というものを有さない。影投げ掛ける本体の有するそれらの一部を有してはいても、決して彼女自身のものではない。だからこそ、彼女の述懐には意味がある。

彼女は変質していく。



成長、と呼ぶこともできるだろう。そう。人間のように。人間のように、生物のように、彼女は経験と知識によって成長していく。人間にとってそうであるように、述懐という行為は彼女の自我の形成に良い効果をもたらすだろう。

ただひとつ疑念を述べるのであれば――

彼女が、自身の黄金の輝きをどの程度自覚しているかという問題がある。

先日、彼女が「夢を見た」夜、僅かなフェルミ粒子を僕の感知器官が検出している。僕の情報蓄積庫（データベース）には、残念ながら《結社》に関する情報は多くないものの、アラン・エイクリィが僕に与えた知識には、幸運にもフェルミ粒子に

関するものがあった。

万が一、彼女が『夢歩き』の能力を獲得していたのだとすれば、その述懐にも、やはり、力が発現し得るのだろう。

ただ、発現は認識によって行われる。問題はないだろう。

彼女の述懐…すなわち日記が、誰かの目に触れることがない限りには、彼女の述懐が力を持つことはない。僕が案じることではない。僕は彼女の日記を見ない。

見ない。

話を戻そう。彼女の日記には問題がなく、有意義だ。

しかし、僕のそれには意味がない。

――意味？

意味が…

――ない？

意味ではない。違う。ただ、僕は、有意性を認めていないだけだ。僕は人間ではない。彼女の騎士だ。僕が操る黄金の力はすなわち彼女の力だ。僕は、僕ひとりでは輝きを得ることもなく、しかし……。

意味は、あるのだろう。

けれど。僕は、自己を述懐しない。

けれども、彼女は言った。

「きみも日記、書こうよ」と。

日記とは自己の述懐だ。ならば、それをしない僕は、およそ記述することが見あたらない。そもそも、日々の行動を記録する必要がない。僕は正確に自己と彼女の行動を記憶している。正確に。

ならば、僕は何を記述しよう。

思考の時間が欲しい。思索か。ただ、彼女が、リリィがこちらを見ている。あれは、そう、監視だ。ペンを走らせる手を止める訳にはいかない。

……皮肉なものだ。

僕は、行動に対して殆どの思索を必要としない。
簡単だ。僕は彼女を、リリィ・ザ・ストレンジャーを守るために存在しているのだから、判断基準は常に明確だ。
時間を要する思索など、僕には。

彼女の命令でそれを要するというのも、また、僕が僕であるということなのか。

いや。述懐しない。僕は自己を述懐しない。
滑稽だ。機械が自分の設計を思うなどというのは、いかにも。滑稽すぎる。
僕の判断基準はひとつだけだ。彼女だ。彼女を守る。
だから――

先日、「料理をしたい」と突然告げた彼女に対して、僕が問題を感じたのも何ら不自然なことではない。キッチン・ナイフの扱いを間違えれば怪我をする。機関式熱調理器の扱いを間違えれば、火傷をする。問題だ。実に、問題だ。
それだけのことだ。
他には、何もない。判断基準はひとつだけだ。

彼女にその〈生まれ〉を与えたエリシア・ウェントワースがそうであったように、彼女もまた、書に触れて学習することを得意としている。そして何よりも、彼女は僕よりもよほど人間に近い。充分に学習すれば、調理の技能を得るのは容易なことだろう。
その結果として、僕の現在における機能、役目のひとつが消失したとしても……。

それは、それで。問題ない。
問題のないことだ。

よし。それなりに頁が埋まった。
自己の述懐に頼らず書ききった。
よし。問題ない。

問題は次、同じことを彼女が言い出した時、僕は何を書けばよいのか。

たとえば、先日。
彼女の睡眠時に僕と戦闘した、イリジアの三柱について

――

◆Aの日記（II）

少なくとも――

少なくとも、リリィがどこへも移動していないことを、僕の感覚器官は正しく認識していた。視覚、嗅覚、空間感覚。影の感覚。どれで計っても同じことだった。

この夜、リリィは別の場所へ移動していたと言っていた。一輌だけの地下鉄ではない、どこか、別の場所へ。結晶体の連なる〈白い場所〉であったと彼女は告げていたが、僕の所有する情報にその場所のことは記録されていない。

僕は思考する。

珍しいことだが、仕方のないことでもある。

あの夜、あの時、僕は即座には現状を判断できなかった。

僕の感覚は混乱していた。

リリィは確かにベッドで眠っている。そう、僕の感覚器官のすべてが告げているのに、僕の〈視界〉に映り込むものは異なっていた。異なるものが見えていた。

その時、大小さまざまな結晶体の連なる場所に、僕はいた。

傍らで眠るリリィを感じているのに、僕の〈視界〉は、『リリィのいない白い場所』にいたのだ。それは異様な体験だった。地下世界で稼動していた僕が、こんな表現を使うのは可笑しいだろうか。

だが、異様な体験、だった。

僕は睡眠を取ることがない。脳がない僕に、その休息は必要だろうか。否だ。故に、僕は睡眠を取ることがなく、同じくして夢を見ることもない。

もしも僕が夢を見ることがあったなら、あれが、夢、というのだろうか。

すべての正しい感覚を一輌だけの地下鉄の内部に置きながら、しかし僕は、僕の自我のようなものと〈視界〉は、白の結晶の場にあった。そして。

――《彼ら》と出会った。

輝く白色を纏って《イリジアのもの》を名乗る彼らは、ひときわ巨大な白色結晶の頂きに立ちながら、明確な敵意を僕に向けていた。

僕は……。

僕はリリィのためにある。

アラン・エイクリィの経験の影である僕が、僕として存在を得ているのは、リリィがいるからだ。彼女のために僕は活動する。自律することも、能力を振るうことも、すべては我が女王のために。

故に僕は『迷った』のだ。

彼女ではなく僕自身を敵視する存在と出会った時、僕は、どうすべきなのか。少なくとも白色結晶の場である〈視界〉にリリィの姿はなく、守るべき相手はいない。

僕は迷わない。そのはずだ。リリィのために、僕はあらゆる状況で即断できる。

けれど、夢、であるかもしれなかったそこで。

僕は、どうすれば良かったのか。

わからない。

今もそうだ。あの時、僕は、何をすべきだったのか。

高みから僕を見下ろす、白い外套のようなものを纏った三名、否、彼ら曰く《イリジアの三柱》を前にして。彼ら



が異様な幾何学的紋様を空中に描くことで引き起こされた〈大陸ひとつ程の広域に渡る空間の致命的な破壊〉を目にした際、僕は。

　僕は、どう反応すべきだったのか。

　僕は自己を存続させるためだけに行動を許されるのか。僕の存続は、リリィを守ることに繋がる？　だからそう行動すべき？　それは、僕のエゴではないと言い切れるのか。

　彼女は既に黄金だ。ならば、僕は、既に――

　判断ができなかった。眠るリリィの気配を未だその時の僕は感じていたし、視覚情報が現実であるかも知れないと判断して動くことができなかった。そうだ、何よりも、僕は、クリッターを有していないはずだった。

　影による自動防御、肉体の影化、影による牽制攻撃。

　他に取れる手段はなかった。アラン・エイクリィが僕という数式を組み上げる際に用いた三つの贈り物は既にない。あれらを再生することは僕にはできないし、あれらはリリィのため以外には決して使用できない。使用しない。

　今の僕で、僕の影で、女王を守るための行動を採っていない状態で、ディスラプターに等しい空間破壊に耐え得るかどうか。

　クリッターで阻むことも、不可能。

　なのに――

　僕は、クリッターを、用いていた。半ば自動的に。

　クリッター・ハウラーインダークネス。

　影が〈かたち〉となっていた。

　僕の影が僕自身を包み込み、僕は、変化した。姿を変えた。僕は、三つの脚と異様にねじれた巨腕を有する影の巨人と化していた。頭部はねじれて、無貌へと変わっていた。

　闇に吠えるもの、黒の王の眷属、とイリジアの三柱が叫ぶのが聞こえていた。初めは意味を取れなかった。王だと。王などはこの僕には相応しくない。僕はただひとりの

女王に仕えるものだ。闇に吠えるもの、そちらのほうが相応しい。

　黒の巨人と化した僕は咆哮し、彼らの立ち尽くす巨大な結晶体ごと、迫り来る攻撃的な空間変異を打ち砕き、そして。

　僕は目覚めた。

　朝が来ていた。

〈視界〉は一輌だけの地下鉄へと戻り、僕は、リリィの眠り顔を見つめていた。リリィはそこにいた。僕もそこにいた。

　それからリリィが目覚めるまでの五十九分を、僕は、自己への疑問と思索で埋め尽くしていた。僕は夢を見たのか。それとも。……それとも？

　……回答は未だに出ていない。

　ただ、深い溜息を吐いたことを憶えている。疲労を感じるはずのない僕の体が、ひどく軋むのをも感じたことも、憶えている。

　リリィは夢を見て——僕もまた、〈同じ場所〉の夢を見たのだろうか。

　わからない。判断材料が少なすぎる。僕には情報が足りない。近頃のリリィが百科事典からの情報入力を求めるように、僕にも、情報が必要だ。

　イリジア。

　白い結晶。

　三柱の彼ら。

　どこかで、僕がそれらの情報を得る機会は、あるだろうか？

　リリィには、まだ、この夢の話をしていない。僕は彼女に嘘を吐かない。彼女が尋ねてきた時には、僕は答えるだろう。けれど。

　けれど。

　何と、説明したらいいのか。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅶ）

一九〇八年（たぶん？）。
青い空の日。ときどきくもり。

最近……。

最近、Aの様子がおかしい。
おかしいよね？

ぱっと見ると、いつもと何も変わらないように見えるよ。
見えるけど、でも、やっぱりおかしいと思う。
たとえば。たとえば、あたしが何かを言った時に……。

いつも、彼はびっくりしないし、聞こえてなかったってこともない。



必ずあたしが何か言ったすぐ後に返事してくる。
つまりさ、Aはいつもこっちを見てるわけだから、あたしが何をするのかっていうのは、大体わかってるってことなんだよ。
（何を言うのかまではわかんないだろうけど、何かを言うんだろうな、話し掛けてくるんだろうなっていうことくらいはわかるよね）

だから驚かない。
聞きそびれたりもしない。

なのに――
きのうときょう、Aってば、変な感じだった！

紫影のソナーニル　～夢幻彷徨～

一度目はきのう。変わった鳥が窓の外飛んでたから、あの子はなんていう鳥かな、ってあたしがAに言った時。

Aは、一秒……ううん、きっと二秒以上あった。
二秒以上してから「ああ」とか言ったんだ。
よそ見とかはしてなかったよ。いつもと同じにあたしを見てた。
でも、なんて鳥なのかは教えてくれなくて。あれ、聞こえてなかったのかな、とだけ思って その時は特になんとも感じなかったんだけど。

二度目はきょう。
外の空気吸いたかったんだ、あたし。だから、たまにマオがしてる（ってマオは言うんだよ）みたいに、この子の……一輌だけの地下鉄の屋根の上にのぼってのんびりしてみたいな、と思って。Aに言った。
屋根の上にのぼってもいい？　って。

で。やっぱり、二秒以上あった。
二秒以上してからAは「ああ」だって。

その時、あたしは、ああ、これはおかしいぞって、思って。
きのうなんとも感じなかった同じ反応のことも当然思い出したし、もう、あとはぽこぽこ、時間の順番むちゃくちゃに色々あたしは思い出してた。

朝、あたしが起きた時。
反応がにぶくなかった？

お昼前にマオが来た時。
マオにはいつも通りの反応のくせに、あたしが話しかけた時、反応が遅くなかった？

ご飯たべてるあたしを見てる時の視線、ちょっと違う感じじゃなかった？
（たべてる最中は、この辛いお料理おいしいけど鉄の細い

棒二本をどう使うのかよくわからなくて、結局スプーンを選んだのが間違いだったのかな、とか思ってて、それについての視線なのかなとか、思ってて）

マオが泊まってくって言った時も――

お風呂はマオと入るからねって、あたしが勇気を出して言った時も。
（マオの前で「いつもAがあたしを洗ってる」的なことを言い出さないかどうか、もう、それはもう、どきどきしたんだよ）

あたしの考えてることを察してくれたのかな？　って、自然と、思いかけてたけど、そんなはずない。ないんだ。
二秒くらい遅れて「ああ」っていうのが、多すぎる。

様子がおかしい。
おかしいよね。

――なぜ、だろ？
なんでだろ。
何か、あったっけ。ないよね。
きのうより前にあった何か、ううん、あたしが、白いどこかに行ったくらいかな。
あ、でも、夢なんだっけ。Aは夢だって言うんだよね。
夢。夢かなあ……違うと思うんだけど。あとは、えっと、ドラゴン？　みたいな子が空飛んでるのを見たとか。これははっきり、夢じゃない。ちゃんと見たもの。

うーん。

こうして日記に書いてみると、うん、やっぱりA、おかしいなって思う。
どうしよう。ううん。どうにか、するんだ。

あしたの朝、Aに言ってみよ。
ちゃんと聞けばいいんだよ。Aはあたしに嘘ついたりなんてしないんだ。

でも。

こんなのって初めてだから、なんだか。

変な感じ……。

◆アレクサンドリア機関図書館記録

［超高濃度フェルミ粒子の観測について］

［一九〇七年十二月二五日
きわめて高濃度のフェルミ粒子の観測情報がピンカートン探偵社より報告された］

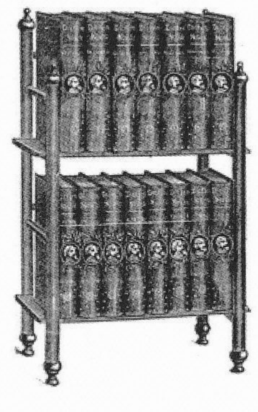
［粒子の追跡観測は失敗。旧ニューヨーク・シティを監視する
《大協会(ファウンデーション)》の継続的欺瞞工作が結果として妨害を働く形となった］

［協力的報告者の発言によれば、《大協会》もまた粒子の追跡観測に失敗している］

［観測値によれば、高濃度粒子の増大は一時的なものであり、その場で完全に消失したと推察される］

［なお、視覚としての現象数式体の顕現は報告されていない］

［碩学協会…西インド会社…すなわち《結社》はカダス地方におけるインガノック・ケースとの類似点、
相似点を走査中］



［《道化師(グリム・グリム)》再顕現の兆候は現在のところ検出されていない］

［いずれの碩学結社も、国家機関も、未だ現象数式体は確保できていない］

［幻想は実在しない。ただ、人はそれを夢見るのみ］

［現象数式体の実物、実体、確保事例が未だ一件も報告されないことがこの普遍的事実を現実として
補強していると言えるだろう］

［人類社会に対して秘密裏に、《結社》並びに《大協会》、アステア大公にのみ奥義を伝え、現象数式
を世界にもたらしたエジソン卿は数年前に消息を絶った］

［彼及びＮＹの消失こそが、幻想の非実在を証明している］

［だが、もしも、現代における幻想の在り方が非在にして偏在であるならば――］

アレクサンドリア機関図書館記録
ＳＲ一九〇八〇一〇一より

◆猫の物語

ひひひ。

ン〜？

なんだい、リリィ。そんなにまじまじアタシの尻尾なんか見てさ。

珍しいもんなんかじゃないだろうに。ひひ。

珍しいことなんかあるもんか。アタシに生えてるってことは、アタシの世界にゃしっぽがあって当然ってことなんだ。で、リリィはアタシの友達なんだろ？　それじゃあ、アンタの世界だってしっぽはあって当然なんじゃニャいの？



ほーれ、ほれほれ。

そりゃあ動くさ。ひひ。しっぽなんだから。

ネコビトはそういうもんさ。しっぽもあるし〈耳〉もある。猫みたいに。ひひひ。

ン〜。ネコビトってなんなのか、って？

そりゃあ猫さ。猫じゃないけど。

そりゃあヒトさ。ヒトじゃないけど。

ひひひ。

難しい顔したって駄目駄目。

リリィがそんな顔しても、ネコビトはネコビトで、猫じゃないし、猫で、ヒトじゃないし、ヒトなんだよ。そういう風に決まってんの。いつからって？　そんなの知らないよ。神さまにでもきいてみな。アンタ、神さまの知り合いくらいいるんだろ？

いない？

いるいる。いるニャア。

ニャアって言った？

そんなこと言ってないニャア。

（よそ見）

ン〜？　神さまの話？

そんなの猫が知るわけないじゃない。ひひ。あの空っぽ頭にでも聞けば？

それか、もしくは……。

自分にきいてみなよ。リリィのほうがよっぽど知ってるってもんさ。

だって、リリィはもう　なんだからさ。

ルシャにきいてみる？

駄目駄目。ひひひ。あの子はそういうの疎いから。

アタシのほうがよっぽど知……らないけどね？　ひひひ。

猫にわかるのは猫のことだけ。ネコビトにわかるのはネコビトのことと、猫のことと、ちょっと人間のことだけ。

ヒトね。

そうだ、リリィ。

しっぽの国の話、してあげよっか。

……リリィがおねむじゃなければね。もう、半分まぶた閉じちゃってるし、おねむだから無理かもね。ひひ。あったかいベッドだもんねえ。そりゃあ、眠たくもなっちゃう

か。どうする？　もう、ねむねむ？

ひひひ。

（よそ見×２）

おや、寝ないの？
まだ寝ないの？

おねむのリリィ・ザ・ストレンジャー。
それじゃあ、お話したげるよ。それは猫の物語。それはしっぽの国の物語。

ああ、ううん、詩じゃないよ。詩なのかな？　どうかねえ。ひひ。

しっぽの国は猫の国。猫がたくさんいる国だ。
あるとき、そこに旅人が訪れて、お腹空かせた仔猫に餌をあげたとさ。ミルクだったかな。猫缶？　わかんニャイねえ。何だったか、だってその仔猫アタシじゃないし。
なんだっけ。
餌じゃなくて、人間から助けた、とかだったっけねえ？
ともかくなんかしたんだよ。いいことをね。
そ。いいこと。ひひ。わかる？　悪いことの反対。いいこと。

そして、それからしばらく後……。
旅人はとんでもない目に遭いました。ああ、猫にやられたんじゃなくって、別の国にいった時の話さ。
チクタクいう神さまだったか、黒い神さまの王さまだったか、ともかく、黒くてこわぁい神さまに目を付けられちゃってねえ。そりゃあ死ぬような目に遭ったんだってさ。
悪い神さまの手下なんかにつかまって、月に連れていかれそうになったとか。なってないとか。

そっちの月じゃないよ。
あっちの月でもなくて、ま、そこんとこはどうでもいいの。ひひ。

で、もうだめだー、って時に！
猫将軍に助けてもらったのさ！

（よそ見）

ン？

ああ、猫将軍ね。
そりゃあ強い強い猫さ。将軍だもの。

ン〜？

ちがうちがう、ライオンじゃあないさ。猫だよ。猫。ニャ〜ゴっていう猫。ニャーっていう猫。知らないのかい、リリィ？　体の大きさなんか関係ないんだよ。だってそれはふるきもののお話だから。猫も、世界を守ってた頃のお話なんだから。

そうそう。そうして旅人が猫将軍や猫軍勢に助けられたのは、仔猫を助けてからちょっと後でね。だから、いたんだよ。

仔猫がね。
大きくなって、猫軍勢のいちばん先頭にいて、爪を振るってたんだってさ。

そうして、こうして。
旅人は無事に生き延びて、旅を続けることもできた。
故郷に帰る頃には、すっかり猫に取り憑かれたみたいになってて……。

それからしばらくすると、仔猫に餌をやったり、拾ったりする人間が増えたとか、増えてないとか。ああ、そうさ。

それより前は、仔猫に餌をやる人間なんていなかったんだよ。

で、しっぽの国は、だんだん有名になっていって。

それから……。

……ンニャ。

なあんだ。リリィ、やっぱりおねむだったんじゃないのさ。

（つんつん）

……すやすや可愛い寝息立てちゃって。ひひ。

仔猫みたい。ニャ～ゴ♪

それじゃあ、この話はまた今度。

ま、アタシが忘れてなければね。ひひ。

おやすみ。可愛い可愛いストレンジャー。

（よそ見）

……で。

空っぽ頭の車掌さん。

アンタさあ。ほんとにずっと見てるんだねえ、この子のこと。

ン？？

うるさいうるさい。そんなのアタシは訊いてないんだよ。

知ったこっちゃないよ、そんなのは。

それより、アンタ――

アンタは、猫のしっぽ、好きなほう？　嫌いなほう？

◆黒の王（ニャルラトテップ）の微睡み

そこで

そこで、見ている、お前

小癪にも〈接触〉を図るか

隠れる気があるようには、見えんな

どこぞの〈糸〉なり〈目〉なり、潜り込んだ、か

まあ、いい

こういったことも、過去になかった訳でもない

在りし日のヨグほど積極に努めるつもりもないが――



壊れん程度に同調させてやろう

丁度、退屈していたところだ

†　†　†

かつて

かつて、脆く儚きものどもが文明の灯りを手にするよりも前には

ふるきものたちがいた

精霊、地霊、妖精、そういった類の連中だ

神と呼ばれた諸王もいたが、その名を与えるには、些か、小さきものたちだった

幻想なりしものども
矮小にして、ひとの黎明を前にして影の如く消え去ったものども

それでも、お前たちよりは、幾らかは我らに近いものではあったが

夢まぼろしに過ぎん
太古にハイゼンベルクが存在していたならば、違った在り方もあったろうが

今となっては詮無きこと

我が千の顕現のひとつに傅き、よく仕えたが、一柱(ひとり)としてその手を我が身に届かせ得るものはなかった

連中には、我が暗黒星の宮殿を開放もしたが、それでも

一柱もなかった

我が闇、我が影、我が漆黒、暗黒宇宙を形成する〈要素(ノード)〉のひとつたる我が身へと螺旋を昇り、位階を上げ得たものはなかった

混沌などには程遠い

その点――
異星(カダス)の連中は、多少、手応えがあったか
文明に依る鋼の躯を得てまでも、物質たろうと足掻くものどももいた

それも、ほんの、瞬きする間のことだ
カダスの連中は、幻想であるが、多少の物質的な繋がりをも有していた
自然との同化を受け入れた竜(ドラゴン)どもがいい例だろう

竜どもよりも、神々と呼ばれたものどもが先に消え失せたというのも、皮肉な話だ

故にこそ、今なお、青き空を残すか

†††

ン――

そうだな

こちらのものにも、元素に近しい概念を素とするものの中には、幾らか見込みがあるものもあったか

火のサラマンドラ
風のブラックドッグ
土のトロール
水のケルピー
タタールの門を超え、元素との結びつきを得ようとしたものども

ほんの、瞬きするほどの以前のことだ
しかし、些かの懐かしさは、ある

……ああ

近頃、紛い物を、目にしたこともあるか

だが、所詮、儚きもの
我が漆黒を得るものはなかった

僅かに、力として用いる連中であれば、ちらほらと見掛けたが
すべて、消え失せた

そう、認識していたんだがな

お前

お前は、何か、知っているな？

――――

――なるほど

名を知っているとは都合が良い
なるほど、Aの一文字とは

我が影、我が闇、我が漆黒を用いたものがいると、遙か
ベテルギウスの跡にまで意識のひとつを飛ばしてみれば

クリッター
現象数式（クラッキング）の慣れの果てか

脆くも儚き人間ひとりの導き出した数式に依って〈月の
王の世界〉に生まれ、黄金を伴い、影を友とし武器とする
〈人間もどき〉か

面白い

道理で

ほんのささやかな

そう、幾億の触腕のうちひとつの先程度の規模ではある
が

そう、道理で、我が漆黒を操る訳だ

お前

もっと、だ
もっと、それを見せろ

――――

――はは

そうか、闇に咆えるもの（ハウラー・イン・ダークネス）、か

はは

はははは

はははははははははははははははははははははははは
はははははははははははは
はははははははははははははははははははははははは
はははははははははははは
はははははははははははははははははははははははは
はははははははははははは
はははははははははははははははははははははははは
はははははははははははは

……愉快なこともある

かつて

かつて、黄金を失い、闇に咆えた我が暗黒の形態を
黄金を伴うものが模倣するか

皮肉なものだ

そう、異空より来たる月の王が仕掛けた〈大機関時計（メガエンジンクロック）〉
の如く

面白い

A、か

ふるきものが消え失せた〈いま〉に、我が暗黒に触れた
もの

その名、憶えておこう

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅷ）

変な子がきた。

変なって言ったら可哀想かな。
うん。でも、ちょっと、変。

っていうか、見たことない感じ。
ううん、見たことない子って意味じゃなくて……
うーん、言葉にするのって大変！　難しい。書きながらだと特にそう。日記書いてるひとって、みんなどんな風にしてるんだろう。
あたしより一日のこと細かく書いてる？
印象に残ったことだけにしてる？



でも、それぞれ、どのくらい細かく書いてるんだろ？

うーん。
ともかく。ともかくね、ちょっと変わった子だったんだよ。
人間じゃないし、鉄（メタル）って感じでもなかった。
猫っぽくもなかったし、うん、グレムリンでもなかった。
ちょっと似てたかな。似てないかな。小さいっていう意味ならグレムリンに似てたよ。

●　こんな感じ

└(<●>)┘　こんな感じ？

色は黒ね。真っ黒！
Aの影みたい。あ、ていうか、そうだよ。
ちゃんとはっきり見てた訳じゃないんだけど、一番最初にその子が出てきた時――

Aの影の端っこが切れて、丸くなってその子になった……みたいに見えたんだよね。黒くて、丸くて、目（目でいいのあれ？）は真っ赤な、あの子。

一輛だけの地下鉄の中に、知らない子がいきなり来たのって、もしかしたら初めてだったのかも知れない。その子、トコトコ歩いたと思ったら、ぴょん、と飛んで、あたしのすぐ近くにまでやって来て。

└(<●>)┘

こんな感じで、何も言わないであたしをじっと見上げて……。

ぷいっ、て顔（？）背けたんだ。
何か気に入らなかったのかな。ぷいって。

└(<●>)┘　こんな感じ

最初は、「誰」とも思わなくて「何だろこれ」ぐらいに思ってたんだけど、ぷいっとしたのを見て、ああ、これは「誰か」なんだろうなって思った。
わかんないけどさ。Aは何も言ってくれなかったし。

そう、Ａ！

Ａってば、「リリィ」って言って、ちょっと焦った声？
で、何か言おうとしてたみたい、だったんだけど――

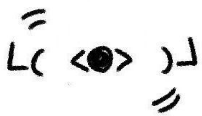
ぴくりとも動かないまま、あたしを見てた。Ａ。
まるで凍ったみたいに……。
いつも、微動だにしないであたしのこと見てたりするから、いつも通りといえばそうなんだけど。でも、何か、ちょっと変な感じだったかな。

で、その黒くて丸い子。
あたしは「こんにちは」って挨拶したんだけど、挨拶しないでキョロキョロしてたから、ちょっと、あたしはムッてなって

小さい子だったし、どっちかというと可愛いほうだと思ったし、あたしより小さい子なのかな、とも思ったから、叱ってみたんだ。

ひょいって抱えて。
「ごあいさつは？」って。

そしたら



こんな感じになって
（ちょっと大きくなった）

怒ったのかな？

……今考えてみると、そうなのかも。
でも、その時、あたしは「これがこの子の挨拶なのかな」って思ったから、よしよし、よくできました、って頭（だと思う部分）を撫でてあげて。

そうしてから。

あたしはまた、この子は何だろうって思って。

色々話し掛けてみたんだけど、さ。
話が通じてるのか、通じてないのか、よくわからない反応ばっかりで。
うーん、抱っこするのは嫌がってたかな、確か。

そのままお昼ご飯食べて、で、ちょっとねむくなって……。

うとうとして……。
膝の上に抱えたまま眠っちゃって（ほんの少しね）（ほんの少しだけ）、はって目覚めたら、いなくなってた。

なんだったんだろ、あの子？

Ａに訊いても「僕にはわからない」「彼は僕が何かをわかっているのだろうか」とか、わかるようなわからないようなことしか言わないし。

なんだったんだろ。

また、遊びに来てくれるかな？
（今日のは、たぶん、遊びに来たんだと思うんだけど……）



↑今日会った子

◆魔女の声

〈イア・イア。こちら《セイラム》より《大協会》へ〉

〈おそらく《結社》よりも先に検知できたのではないかしら〉

〈わかりませんけどね。彼らは彼らで奥義を極めているのだと言うし〉

〈ああ、今風に言うと、あれかしら。科学の先端？　物理の？真理？〉

〈これじゃああっという間におばあちゃんになってしまうわ。嫌ね、本当。時間って〉

〈マルセイユは今日も平和なものよ。相変わらずね〉

〈だからこそ、でしょうね。検知できたのは。
フェルミという呼び方は好きじゃあないのだけれど、そういうものを見つけた



わ〉

〈検知したのは、あなた方の領域でしてよ。
ザ・ロック。フォート・アルカトラズ。ええ。新大陸、西海岸の〉

〈エジソン卿の《時間牢獄》と呼んだほうがそれらしいかしら？〉

〈オリジナルの《時間牢獄》がザ・ロックにあることぐらい、このわたしを以てすればお見通し。残念でした。ほら、少し前に《結社》の彼女が似たものをカダスで使っていたでしょう？　あれで、ああ、同じものを前に検知したわと思い出して。ええ〉

〈そこで検知したわ。ええ。それは、私の愛する深淵の混沌ではなかったけれど〉

〈ひとならぬ、何かの気配〉

〈このキザイア・メースンが初めて感じ取る、あたらしきものの気配〉

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（Ⅸ）

一九〇八年（たぶん）。
空の色はわからない（窓の外見てない）。

……かぜ、ひいた

さむい

でも、あつい

頭、ぼうっとする……。
あ。これ、前にもあった感じに似てる。
あと、鼻……。はなみずでる。



はながつまる……。
「魔女化の影響による発熱では、ないね」
って、A。前のとは違うんだってさ。ええと、寒いの。
寒いの（キャッチ・コールド）つかまえる。
オリエントのほうだと、フージャっていうんだって。
で、極東でいうと、かぜ。

あたし、カゼひいた。
ふらふらして、ぼーっとして、鼻ずるずるで、体に力入らなくて……。やな感じ。ぽわぽわしてるような気もするけど、いい気持ちじゃないよ、これ。

頭は痛くない（頭痛はあるかい、ってAに訊かれた）し、咳はそんなにない（ちょっとはあるけど）し、ひどいカゼってほどじゃないみたい。この上、頭痛に咳がきちゃったらさんざんだ……。

うー、はながー。

……きょうのAはすごく、こう、なんていうんだろ。
優しい、じゃなくて、なんだ、てきぱき？
いまも、日記がよごれる前にぱっとタオルで拭いてくれた。んー。

じゃあ、朝のことは許してあげようかな。
朝。だって朝、ひどかったんだ。
あたしが、ぼうっとする、はなみずすごい、ちょっと咳が出る、って言ったとき。Aってば。あたしを見たまま反応がなくて――

あれ、この前もそんなことあったよね？？
あった。あったよ。
ええっと、えーっと！　あとで日記読み返してみよっと。
いまは、うん。今朝のこと。A、あたしを見たまま身動きもしないで二秒。
長い！
「きみは　であるのにそんな――」
とか！　二秒たってようやく動いたとおもったら、そんなこと言い出して！
あたしが　なんかじゃないっての、何回言えばいいのかな。
ばか。Aのばか。
もしかして、Aにとってあたしは　ってことを言いた

いのかな。違うよね。違うよ。そういう感じ、しない。
……うん。あとで、この前の日記から読み返そう。
だから、いったんおいといて、と。

いつもの調子に戻ってからは、A、色々やってくれたよ。
朝ご飯用意してくれて、着替えさせてくれて、「入浴はやめておこう。体温の急激な上下を警戒したい」とかでお風呂のかわりに汗拭いてくれて、お昼ご飯用意してくれて――

あれ？

いつもと　かわんない……。

……でも、普段はお風呂イヤ（嫌いじゃないよお風呂！
でもAにいれてもらうのはイヤ）だけど、きょうぐらいぐったりしてる時は、体拭いてくれるの便利だね……。

あ、そういえば。

あたらしい料理、たべた。
「これを摂取すると免疫力が向上する」とか言ってたね、A。

えっと。

チキンを、たっぷり小麦粉つけて炒めて。
タマネギとかも炒めて、で、ハーブいくつかいれて、コトコト。おなべ煮込むの。
普段は料理するところなんて見せないのに、A、珍しく、厨房つかってた。

ハーブの香りがなんだかいい感じ。

で、じゃがいも、ニンジン、カボチャにオリーブ、きのこにかぶに、いろいろ、またおなべに入れて……それを、あつーく、あつーくして、もくもく湯気出しながらいただくの。あつあつ！

おいしかったよ～。
あたし、おなべの料理って好きだな。
時間かかるけど、楽しいよね。
たくさんできるし。難しくない（ふうに見える）し。

でも、これ、なに？　ってAに訊いたら――

「チキンスープだよ」だって。

そのまますぎてびっくりしちゃった。
名前、そのまま！

それで……。

うー。

だいぶ、よくなってきたけど、まだ、はなみずでる……。

きょうは日記、ここまで！
明日、元気になってたら、前の日記見返してみなきゃ。

◆《結社》の記録

〈地下世界における、コード「A」についての性能考察〉

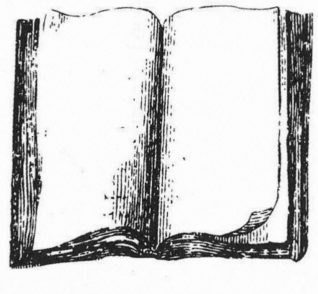
〈性質：現象数式で形成された地下世界における『傷（ほころび）』、もしくは研究員アラン・エイクリィの手による特殊な計算式〉

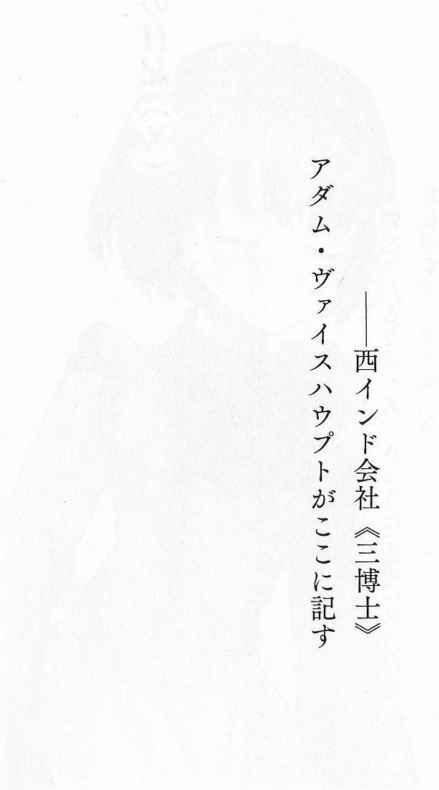
〈制限：計算式作成者の設計によって原則的な行動基準が幾つか設けられている〉

〈能力：影化　　…スピードA　正確性A　防御力A〉

〈能力：クリッター召喚　…スピードA〜S、正確性A、破壊力S〉

〈影化能力の特徴から類推するに、計算式作成者の用いた式は、かのクルーシュチャ方程式に接近していると思しい。恐らくは偶然だろう〉





〈コード「A」の能力は以上。現象数式体（合成体）との接触に伴うコード消失の直前に黄金の力を得たという観測報告もあるが、NYにおける現象数式痕の消失した現在となっては検証不可能〉

〈黄金銃――〉

〈黄金の力の捜索は、欧州、南北新大陸、オリエント、アフリカ、カダスを問わず続行〉

――西インド会社《三博士》
アダム・ヴァイスハウプトがここに記す

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（X）



一九〇八年（たぶん）。
グルグル。

カゼがなおらないよ……？
はなは、もうだいじょぶ。
咳も、だいぶ喉が苦しいこともあったけどもう平気。
熱ももう、ないんだけど……。

あたまがグルグルするよ

ちょっと、あつい　の　かな

朝起きたときは、あ、きょうは元気になったかも、って
おもって

お昼、夕方、あ、もうぜんぜんだいじょぶだ、って

でも、夕ご飯たべてから、なんか
グラグラする……

夕飯、なにたべたっけ、えっと……

うう、ぐらぐる　ぐるぐる

朝は……たまごを落としてかいたリゾット……みたいな？　もの？

「カユ、という」「ゾウスイだったかな」とか、Aは言ってた。

ふわふわしておいしかった

あったかいレモネード飲んだのは、午前中？　午後？

すごいからいものを飲んだのは……
あ、ちがう、きのうだよ。ショウガ！　すごいからいの！

お昼は、朝のリゾット風のものに、ダイコンとか、お肉の？　ボール？　みたいなのを入れて煮込んだものだったっけ。おいしかったよー。あつあつ。

で、夜はええと……

ほそくて……ううん、そんなにほそくないけど、ふといってほどじゃなくて、うーん、食べものって考えるとふとい、でいいのかなあ。

パスタのふといやつ！　そう！

うう、ぐらぐらする……

パスタのすごい太いのを、やっぱりこれも具をたくさんいれて煮込んだもの。おいしかったけど、けど、すごい、あつかった。

えと、おかわりしちゃった。
おかわりしたの、ひさしぶり。Aってば「三杯目はどうだい」とか言っちゃってさ。うれしかったのかな？
ふたつでじゅうぶんだよ！

で、デザートに、冷えた梨たべて……

丸い梨だったね。前に見た、へにょっとしたのとはちょっとちがう。
冷たくて、シャキシャキしてておいしいの。

それから
それから、えと

……うう、ぐらぐらするなあ

えと、寝る前に、って、Aが……
あったかい、砂糖で甘くした卵のスープみたいな……
「タマゴザケという。オリエンタルの風習で用いられる」
とか、言ってた、っけ？

……ぐらぐら、ぐるぐるするのは、それ飲んでから

……？

うう～
もうねる……

……まぶた、とじても、グルグル……

◆E博士の発言

〈認識とは――〉
〈奇妙なものだ。ンン、実に、奇妙にして奇異なるものだ〉
〈人智を超えるものとは何か。
それを諸君らは生まれながらに知っている。そう、識っているのだ〉
〈すなわち認識である〉
〈すべては認識に過ぎない。
ハイゼンベルグだけではないとも。私が拓く学問に於いてもその通り〉
〈宇宙は物理で成立する。同時に認識で成立するものでもある〉
〈故に、私は、この呼気覆面（ガスマスク）を外さんのだよ〉
〈これは私の仮面（ペルソナ）だ〉



〈古代、人は意味を以て仮面を象った〉
〈仮面とは、決して、素顔を覆い隠す仮初めのものではない〉
〈無限に連なる人の精神、その形態、その顕現だ〉
〈すなわち私は仮面を以て、認識に抵抗しているのだよ〉
〈可笑しいかね？〉

一九〇八年某月某日
ロード・アヴァン・エジソンの弟子たるE博士の発言より



◆Aの日記（Ⅲ）

——リリィの体調は快方に向かっている。

これまでの経過を鑑みれば、遅くとも明日の朝までにはどの症状も検知されなくなるだろう。僅かに残っていた咳も、もう彼女の喉から聞こえることはない。

しかし、本日、今夜の『日記』は僕が付けることとなった。彼女には無理だからだ。

僕に責任があるだろう。どうしたら普通感冒が一日も早く快復するのか、と問い掛けた彼女に、僕は返答した。ここに至ってはふたつしかない、と。

すなわち、栄養の摂取。充分な休息。



その会話が、本日の夕食時。

彼女は普段以上に食物を摂取した。結果、彼女は——

通常よりも数時間早く就寝する運びとなった。眠ってしまったのだ。

たとえば入浴などのために無理に覚醒させて、体温の上昇と下降を短時間に繰り返すのも、現状では、良いものではない。文化的人間の行動としてそれは些か不本意ではあるものの、僕は彼女の就寝を認めざるを得なかった。

仕方のないことだ。

彼女が、恐らくは寝惚けた状態ながらも、懸命に、それでもわずかに唇を開いて、

「日記、かわりに書いて」と。

僕に、命じたことも。仕方のないことだ。

以上、今夜の経緯。終了。

頁が随分と余ってしまうな——

彼女が、リリィ・ザ・ストレンジャーが普通感冒……カゼを引くことの論理的齟齬と物理的矛盾について論文形式で記そうか。それとも、今日の、夕食の献立でも書いておこうか？

穏やかな寝顔だ

美しい

……いや、彼女は起きて来ない。本日における夕食の献立を記す。

イタリア風のスープ。よく煮込んだ野菜スープに細かく千切った形のパスタを混ぜたもの。作成意図も性能も、オリエントの「カユ」「ゾウスイ」と大差はない。

リゾットを選ばなかった理由は、昨日がオリエント風のリゾットである「カユ」もしくは「ゾウスイ」であったため。

……近頃は、メニューも増えた。

何故だ？

無論、彼女がそう望むからだ。僕は彼女の望むことを果たす。

けれど、この僕はそう生まれついていただろうか。

影化の応用として僕の有する〈無限のバッグ（ウェイトレス＝バルクレス・バッグ）〉と〈隙間のポケット〉に与えられたのは、所詮は数式としての僕に与えられた、ストレンジャーのための、ある種の維持装置だ。

メニューは限られていた。必要がないからだ。サンドイッ

チ。ビスケット。恐らくは、彼の食していた主な食事の〈イメージ〉なのだろうが——

彼（アラン）は、各地の食に詳しい人ではなかった。

ならば何故、僕は、こうして……？

◆Aの日記（Ⅲ—Ⅱ）

そうだ。

彼女だけではない。

論理的齟齬と物理的矛盾を起こしているのは、彼女の体だけではない。

この、僕も、そうなのだ。

決して『日記』などに記すことはできない。もしもこれが僕の認識より生じた矛盾と齟齬なのであれば、僕の記憶にのみ、記録にのみ、留めておくだけのこと。

夜。夢を見ないはずの僕は、また——

眠る彼女を視界に捉えながら、あり得ざるものを〈見て〉しまう。その夜、僕が〈見た〉のは、僕が〈いた〉のは、



そう。

——薄暗い、ジャズ・ミュージックの流れるバーの片隅だった。

『お客かい』

スツールに腰掛けた紳士がそう言った。

『ならば貴様は何なのだ』

カウンターの奥にいる白い服の誰かが言った。

『……』

テーブル席の三人組がこちらを睨んで白く輝いている。

『下らん』

反対側のテーブル席で黒い男が言った。

『はい、あるじ』

機械が何かを言った。

僕に似ている。外見ではなく、何かが。

『苛めては駄目よ』

スツールの紳士にショゴスが小さく囁いた。

ある種の神殿を僕は想像する。

僕の情報庫にはグリースやローマ、北欧、エジプトやインドの他には、せいぜい南新大陸の神話しか用意されていないというのに。

暗黒の気配を僕は感じ取る。ひどく恐ろしいものだ。

僕は、僕が恐怖を感じる器官を有していないことに感謝する。

暗がりの黒色の中を流れていく音は、ジャズ。ピアノだ。

かつてニューヨーク・シティで興りつつあった新たな旋律は、紳士が傾けるグラスに揺れる氷の音色によく馴染む。

僕は、暗がりの、バーの片隅にいた。

『実に、興味深い。こうして一同に会することがあろうとは』

『偶然ね』

『まことに。奇なること。このような面々とは、ひどく運命的だ』

『……』　白熱が眩い

『彼らは随分ときみを警戒しているようだ。過去に何をしたね、きみ』

『黙れ』

黒い男が視線を向けると、白い輝きはたちまちのうちに消え去った。

喰われたか、呑まれたか。それとも逃げたのか。

『ご注文は？』

カウンターの奥で、白い服の誰かが僕に問い掛ける。

僕は、短く、炭酸水、と答えて——

そして。

五感のすべては僕のものとして取り戻される。視界が完全にひとつになり、彼女、ベッドの中で穏やかに眠るリリィ・ザ・ストレンジャーのいる地下鉄の中へと僕の感覚のすべてが〈戻る〉。

いつもの夜のままだ。

何も変わらない。僕は、見るはずのないものを見ただけ

けれども――

僕の右手には、水滴をまとわりつかせた冷たいグラスが。ひとつ。

炭酸の気泡が僅かな音を立てていた。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（XI）

一九〇八年（たぶん）。

青い空の日！

カゼ、なおった！

頭すっきり、喉もだいじょぶ。

咳しないし、からだもどんより重くないし、熱くもないし！

Aにはお礼言わないと、かな。

ずっと見ててくれたし、ご飯だって。

ああ、うう、ちょっと喉かわいたな、と思ったらすぐ何か出してくれたし。うん。



ん。

んん？

あれ？

いつもと……同じだよ……。

うー。

でも、そ、それはそれ、だ。うん。あたしが困ってたのは本当だし、彼が色々やってくれたのも本当。変なことないよ。うん。困ってる時に助けてくれたんだから。

お礼言うのは普通だよ。うん、ふつう。

今日だって無理言っちゃったし。

カゼひいてるときに食べて、おいしいなって思った料理……極東の……えっと、なんだったかな。ヌドゥー？　ヌードル？　えっと。ちがうよ、ヌードルじゃなくて、似た感じの音の……。

ウドン？

そう、そう。ウドンだ。ウドン。パスタの太いやつ。歯応えが不思議な感じで、あつあつで、たくさん具が入ってて。おいしかったから、また作ってもらったんだよね。今日。

前と同じがいいって言ったら――

「やめておいたほうがいい」
そんなこと、Aは言ってたんだけど。何言ってんのかな、いいよ、おいしかったんだから、また食べさせてくれてもいいじゃない。ね。

そう言って、出してもらって。
食べたんだ、けど。

すごく……あつかった……よ……。

汗、すごい出て。
こんなに熱くなかったよね!?　って、何度も何度も言ったけど「前のままだよ」って。わからなかったんだ、あたし。カゼの時は、あついとか、さむいとか、そういう体の機能がちょっとおかしくなってるってこと。

あんなに汗かいたの、いつぶりなんだろ……。

うん。ひどいめにあったけど(おいしくはあったけど)、自分のせいだし。それはそれ。無理いって、ウドン、出してもらったし。

お礼言わなきゃ。うん。
でも、お礼って、あらたまって言うのってちょっと、

恥ず――

恥ずかしい？　……うん、恥ずかしいよね。

どうやって言おうかな。
ありがと。とか。ぱっと、ご飯の時とかに言い出すとか。
それじゃ明日になっちゃうよ……。
この日記書いた後、寝る前にさらっと言っちゃう？

うーんうーん。

んー……。
あっ、そうだ。

ここに書いとこ。どうせ、見てるんだよね。A。

たぶん？

うん。そうしよっと。えっと……。

いろいろ、ありがと。A。

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（XⅡ）

一九〇八年。たぶん。
青い空の日……。

……？

また、変なところにいた。
変な夢を見たんだ。
Aは夢だって言い切るんだから、それはそうなのかなって思うけど。だってこの地下鉄の「部屋」からあたしは下車したりしてないんだ。
ひどく暗い場所にいたと思う。この前の白い場所とはぜんぜん、違う。
街、なのかな。多分そうだと思う。影みたいな街だったよ。



暗くてよくわからないんだ。暗い、影みたいな。暗闇、っていうのとはちょっと違う。だって、まわりに何があるのかはいちおうはわかるから。
ぽつんと立つあたしのまわりには誰もいなかった。暗がりだけ。
空も、地面も、左右も、ぐるりと暗い。
それでいて輪郭はなんとなくわかる。あたしは街の中にいたんだよ。ウォール・ストリートにちょっと似てたかな。
超っていうほどの高層建築じゃなかったと思う、けど。
広い広い道だったよ。あたしがいたのは。

で、鉄が転がってた。
ううん、紫色の世界で見たあの鉄（メタル）じゃないと思う。
大きな大きな鋼鉄の塊。
あたしは、不思議と、あたしとAのクリッターのことを思い出してた。
ランバージャック。アントライオン。スケアクロウ。あたしの選んだ、Aの影。あたしのために死んでしまった、あたしとAの影の鋼。
死んでたのかな、あの、黒い場所の鋼鉄たちは。わからない。
どういうかたちだったのかははっきりしない。人みたいなものも、馬みたいなものも、人と馬が合わさったようなものも、脚や手がたくさんあるようなものもあった。
みんな、人間よりも大きい。
その子たちは動かなかった。何も言わない。

なんだろう？
『ここに来るのは少し早いよ。この物語は、まだ、きみには綴られない』
『順序があるからね』
『リリィ・ザ・ストレンジャー』
そんな風に誰かがあたしに言った。
たぶん、男の子。あたしより小さい、かな。
『これらは、僕が《盟約》を口にする前の時代のものだ』
確か、うん。
たぶん、そんな風に言ったっけ。
男の子の姿は見えなかった。虹色の、羽根、かな。うん。そういうものを一本、手に持って暗がりの中に立っていたのだけがわかった。

虹の鳥の羽……？

ん。あれ。おかしいな。虹の鳥って、なに？

でも、あれは、多分、虹色の鳥の羽なんだよ。なんとなく、そう思う……。鳥なんて、その暗がりの街のどこにもいなかったけど。

『それにしても驚いたな。きみは時間を超えるのかい？非在だからかな。それとも、僕と同じように、ヨグ＝ソトースを超えて刻の記憶を見ているのかな』

……確か、こう。

何言ってるのかわからないけど、時間とか、非在とか、ヨグそとすとか、そういう風に言ってた。わからないけど憶えてる。だって、あたしは忘れたりしたくないから。

男の子は、またどこかで会おうね、って言ってどこかへ行った。

それから、あたしは……。

瞼を閉じてこの一輛だけの地下鉄の「部屋」へ戻る……。

戻るっていうか、目覚める？　その前に……。

空の遠くに落ちていく、光を見たんだ。

あれは、きっと――

雷――

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（XⅢ）



一九〇八年（たぶん）。

青い空の日。

また。夢。

ゆうべも夢を見た。

長いこと夢を見てたみたいで、起きたらお昼を過ぎてた。ぐう、ってお腹が空いた音を出して、その音にびっくりして目が覚めたぐらい、あたしは長く眠ってた。

ちょうど、ゆうべ眠る前にAに教えてもらってたんだよね。

夢っていうのは、何か、ってさ。

メスメル学、だっけ。人間の、心理？　そういうものを勉強する学問が世界にはあるんだって。初めて聞いたよ。メスメル。ちょっとかわいい名前。

Aが言うには、メスメルでは、夢は、あたまの中の情報をどうとか、こうとか？

よくわからないけど……。

自分がどこかで見たものとか、読んだものとか、体験、したもの。そういうのをわかりやすく整理したり、よけたり、色々してる時に見るものなんだって。

……本当に？

だって、あたしのゆうべの夢は変な感じだったよ。
あたしの知らないものばかり。薄暗い場所でさ。うん。暗い場所だった。あ、この前の、街、みたいな場所とは違うよ。違ってた。どこかの建物の中だったから。

薄暗くて、でも、ちょっといい雰囲気。悪くない感じ。
ちょっと、大人っぽくて。
あたしはそういう場所のことを知らなかったし、見たことも読んだことも、聞かされたことも多分なかったんだよ。でも、夢に出てきた。

さっき、百科事典をばーっと見てたら、それっぽいものを見つけた。それでようやく名前がわかった。あたしが夢に見た暗い場所は……。

バーっていうんだよ。
お酒、のむ場所。大人が。
きれいな音楽が流れてた。素敵な音。
前にも聴いた感じの曲だった。
あれは、ブロードウェイで聴いたんだ。サムの弾いてくれたピアノ。

ジャズ、っていうんだったよね——

あたしは入口っぽい場所に立ってた。

奥のほうの……カウンターっていうんだよね、奥まったところにあって、細長くて、四角形に折れ曲がってるテーブル。百科事典の『バー』のところで読んだから名前は多分これであってる。そこの奥には、白い服の人がいてさ。

静かにグラスを磨いてた。
見覚えのある人、だった。たぶん。

顔はよくわからなかったけど、前もそうだったから、それでわかった。白い、ぼんやりした人。前にほら、夢……で？　卵みたいなものを？　くれた人。たぶん。

『いらっしゃいませ』
英語に聞こえたけど、グニャグニャって響いた気もする。
白い服のひとはあたしに言って、あたしは——

ここは何かのお店なんだ、って思ってさ。
ああ、これはだめ、まずいよ、って。さあっと背中が寒くなって、冷や汗、どっと出てきた。それに、恥ずかしくて、顔、熱くなっちゃって。夢なのに変だよね。変だ。

だって、あたし、お金とか持ったことないもの。

あのひとの……あたしに〈かたち〉をくれた、あのひとの記憶なのかな。お店のことはなんとなくわかるけど（お金で品物を買うところ。だよね）、あたし、本物のお店に入ったことなんて、なくて。

今だから「夢のバーで」とか言える、けど。そのときは、夢とかどうとか、わかんないし。さ。だから、もう、あたし、困って、困って。
ごめんなさい、って言ってお店を出ればいいんだ、って気付くまで一〇秒くらいかかっちゃったんだと思う。
二秒かな……詳しくは、わからないけど、ちょっと間があった。だいぶ？

「ごめにゃさい」

とか、言っちゃったんだよね……。
舌がちゃんと回らなくて、変な発音になって……。

『あらあら。固くなって。いいのよ、ここではお金はいらないの』
女のひとの声。いつの間にかあたしの横にいて。

黒い髪で、黒い瞳の、こう…なんていうのかな、オリエントな感じの、すごい綺麗な女のひと。横にいたかと思ったら後ろにいて、あたしの両肩、ううん、背中、かな。ぽんと優しく押して……。

あたし、自然と前に進んじゃって、あれ、あれ、と思ってるうちに、カウンターの…スツール？　うん。スツール。くるくる回る椅子に座ってた。

『これは可愛らしい。ひとりでここへ来たのかな。初めまして、お嬢さん』

　隣の隣のスツールに座ってお酒を飲んでた男のひとが、こんな感じで、いきなり可愛いとか言ってきた。

　む、と思ったけど……。

　さっきの、綺麗な女のひとが彼の隣に座って、そうして並んだふたりはすごく似合ってて、そういう風に描かれた絵みたいに、しっくり？　うん、しっくりくる感じだったから、ああ、きっと、恋人同士なのかな。って思って。

『ご注文は？』

　カウンターの奥の白いひとが言って。

あたしは、お水、て言ったのに、出てきたのはお水じゃなかった。

　えっと、きらきら金色に光る液体に、白い氷を浮かべたグラス。

『黄金の蜂蜜酒を、貴女に』

　お水じゃない？

　甘い味がした。でも、よくわかんない感じ。お酒ってどういうのなんだろうね。

　あれはお酒でよかったのかな。

　……夢なら、飲んだこともないお酒の味なんてわかるはずないか。

　うーん。

　あ、それで、えっと……。

　せっかく出してもらったから飲もうかな、でも甘い割に飲みにくいし(なんだか辛い感じもしてさ。変な感じ)、困ってたら、お店の、カウンターじゃない側の奥から——

『　　　　　』

　いざ書こうと思うとなんて書けばいいんだろ。

　声、したんだよ。したんだ。

　したけど、はっきり英語じゃなくて。

　キンと金属が鳴るみたい、でも、グニャグニャしてるような、水の中のような、ともかく、変な感じ。でも聞こえた。声ね。

　なんだろ、と思って見てみたら、テーブルのある席にいる、三人の白いひとたちが何か言ってた。たぶん、あたしに向かって。

　はっきりした英語じゃなかったし、よくわからないけど、ええと……。

　優しい感じだった。うん。

心配した、みたいな感じのことを言われたんじゃないのかな。

　そういう、響き？　だった。うん。

　よくわからないから、うーん、って首を傾げてなんとか聞き取ろうとしてたら——

『あまり聞き取らないほうがいい。
イリジアのお歴々の声は、あまり心地良いものでもない』

　隣の隣の男のひとが言ってきた。

『あら。随分と失礼な物言いをするのね』

　隣の女のひとが言う。

　ほんとほんと。

『だが、事実だよ。それが証拠にヒュプノスも良い顔をしていない』

『こんなこと言われてるわよ、マスター？』

確か、こんな風なやり取り。女のひとが、カウンターの奥にいる白い彼のほうを見て……白いひとは、やれやれ、っていう感じで肩を竦めて……。

それから……。
別の誰かがお店にやってきて、奥の三人と何かを話して……。

あたしはジャズの音を聞きながら、甘くて変な味のあれを飲んで。それで、うつらうつらして、気付いたら、目が醒めちゃってた。

一両だけの地下鉄の「部屋」で、お昼過ぎてて。瞼を開けたら、Aがあたしの頭の側からじっと顔を覗き込んで
て！　ああ、もう、びっくりした！

それで、さ。

ううん。夢……夢で、いいんだけど、べつに……。そこでAとケンカするつもりもないし、あたしじゃなくて、エリシアってひとの記憶に『バー』があったなら、それは、それで、いいんだ。いいんだよ。

でも、その。どうしたらいいんだろ。
持って来ちゃった。
あたし、目が覚めたとき、両手で……。

飲み終わったグラス、持ったままだった！

……夢でみたものって、持って来られないよね。ね？

どうなんだろ……。
日記を書いてるあたしの手の横に、あのグラス、まだ、ちゃんとあるんだ。

◆深淵の酒場にて（Ⅰ）

『おや、可愛いお嬢さんは帰ってしまったか。残念なことだ』
『あら。あんなに若い子との浮気がお望みかしら』
『ははは。私が誰を愛しているかはきみが一番よくわかっているはずだよ』
『莫迦』
『……時に、ヒュプノス。あの子にクリスタライザーを渡してあるようだが、どういう嫌がらせなのかな。あれは』
『貴様に答えることではない』



『非在の狭間からかろうじて顔を出すか、出さないか。
そんな健気なものを、まさか――
意識と無意識の境界。夢幻の胡蝶の仮面を纏うきみが、気に掛けるか？』
『生物の身でこうして〈ここ〉へ無理矢理接続する貴様の言えたことか』
『メスメルの秘奥という奴だよ。私は万能だからね』
『マスター、おかわり下さるかしら。ああ、いいえ、スクリュードライバー』

『かしこまりました』

『このひとにはカルーアミルクで』

『いや、私は甘い酒はあまり……』

『どうせ酔わないのだからいいじゃない』

『だからこそ、味はせめて好みというものをだね』

『それで、あの迷い子（ストレンジャー）、次はいつ来るのかしら。次も迷わず来られるかしら』

『さて。どうかな――』



◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（XIV）

一九〇八年（たぶん）。

青い空の日！

きょうは、外の空気をたくさん吸った日！

空を駆ける地下鉄の「部屋」の窓を開けて、ってことなら毎日吸ってるけど、きょうは特別。ひんやりしてきもちのいい空気をたくさん吸って、それに空の青い色をたくさん浴びた。

む。

空の青い色をたくさん見た。



ううん、ちょっと違う。違うよ。Aが（約束して日記を書いてる最中は五フィート以上離れるように言ったのにやっぱり見てる！）浴びるという言葉はおかしい、って言うから書き直してみたけど、ちょっと違う。

屋根の上に広がる青色は、やっぱり、見た、っていうだけじゃ足りない。

あたしの全身にのしかかってくるみたい。ううん、あたしが空の中に　とぷん　って全身を浸けたみたいな感じ。浴びる感じ。

うん。うん、屋根！

きょうは、一輛だけの地下鉄の屋根の上にのぼった。空

を走る速さをゆるめてくれたから、風に吹き飛ばされたりしなかったよ。でも、それなりに風は強くて。

……面白い方法でのぼったんだよね。

お昼のちょっと前に、あたしが「外に出たいよ」って言ったら……。

「きみの望むままに」とか、Ａが言って。

地下鉄の速さがちょっとゆっくりになったかな、と思ったら、ウィーン、ウィーンって変な音。機械の音。天井がぱかっと開いて、そこから金属の階段がカシャッカシャッて〈開き〉ながら床にまで降りてきて。

天井に折り畳んであったんだよ、ね？　たぶん？

でも、あんなものが収納できる場所なんてあったかな。

「僕ほどではないが、一輛だけの地下鉄もまた、きみの願いを叶えようとする」

だってさ。

よく、わかんない。あたしが願うと階段ができるの？

うそばっかり。

……うそ、じゃない、よね。Ａは嘘言わないよね。

じゃあどういうことなのかな……。

ううん、今度ちゃんと教えてもらう。

それで、階段が床まで降りて、そしたら天井がもう一回ぱかっと〈開いた〉の。今度は折り畳み階段が降りてくるんじゃなくて、開いた先には空が見えた。

窓からだって見てるのに、ふしぎ。空いっぱいの青はあんなに違うんだって、知らなかった。だって、右も左も、上も、ぜんぶ、ぜーんぶ青！

青い空！

窓から空を見るの、好きだけど、大好きだけど、きょう

見た空も大好き。窓から見る「きれい」とは違うんだ。えっと、ね――

まるで、あたしが、空になったみたい。

まるで、あたしが空になってて、手は羽とか翼……ううん、手、腕は、風になったみたい。白い雲はなんだろう。服の模様かな？

時間、あっという間に過ぎていってたみたい。最初は、落ちないようにってあたしのこと抱えて離さないＡの腕が気になってたけど、すぐ気にならなくなって、真上にあった太陽も傾いていって……。

うん。

それで、えっと。

……ふっと、体の力が抜けたんだよ。うん。

あれ、どうしたのかな、と思ったら、変なことになってた。

あたしを後ろから抱えてるはずのＡのほうを、振り返ろうとしたんだよ。体が軽くなったのは、Ａがよろめいたから、なのかな、って思って。でも。

あたしの後ろには誰もいなかった。

というか、あたしじゃなかった。

翠の服でもないし、クロゼットに入ってる別の服でもない。朝、Ａが着せてくれた服が何なのかぐらいはちゃんとわかるし、それに、服とかそういう問題じゃない！

裸、っていうのは違うのかな……。

振り返る動きをする〈首〉は随分長くて、だから、あたしはその時の〈あたし〉の姿をぐるっと一目で見渡せた。

うん。背中、大きく開いた翼から、背中、しっぽまで。

そのとき、あたしは〈あたし〉じゃなくて――

何日か前（たぶん日記に書いたよ！）、窓の向こうに見た〈あの子〉の姿だった！

おとぎ話のドラゴン！

やっぱり、Aに見せてもらった百科事典のよくりゅう？
とはちょっと違う感じ。くちばしは見えなかったしさ。
翼にちょこんとしたかわいい指先もなかったよ。
びっくりした。
ほんとに。うわー、うわー！　ってなって、Aのことを
呼ぼうとしたけど、言葉にならなくて、あの声になった。
前に〈あの子〉が鳴いた声。そっくり同じ声。

声まで一緒！　ちょっと、驚いたっていうより、すごい
なって思った。だって、あたしが声を出そうとしてるのに、
あたしの声じゃないなんて、すごい。

わあ……って、ちょっと、じんときて。

ふと下のほうを見てみたら、あたしがいた。
うん。あたし。リリィのあたし。

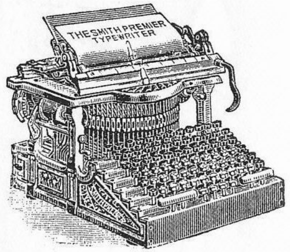
Aに後ろから抱か……っていうか、落ちないように固定
されて、一輌だけの地下鉄の屋根の上にいるあたし。
そこにいるあたしは、真上を見てた。で、〈あたし〉と、
目が合って――
……あたしはあたしに戻ってた。

あたしはAに抱えられながら真上を見ていて、〈あの子〉
がこっちを見ながらちょっと首を傾げて、翼を羽ばたかせ
て、空のむこうへ消えていくのを、見てた。
……やっぱり、夢とかじゃないと思う。二回目だもの。

あの子、たぶん。
前にあたしが見たのと同じ子だよね？？

◆P探偵社報告書

〈結果報告。
婦人Eの編纂記録の受領には失敗〉
〈理由。政府当局（具体的にはCIGこと『中央情報グループ』であると判断される。
付属報告書一号を参照のこと）の妨害のため〉
〈婦人Eの編纂記録、妨害の影響により複写物三件は完全損失。原本の行方は不明〉
〈婦人Eの『手記』の複写物の入手には成功。複写物が何部存在するかは不明なれど、入手した一部に関しては本部へ提出済み（付属報告書二号を参照のこと）〉
〈婦人Eの消息は不明〉
〈以上〉
〈以下は、報告者、モニカ・ヌーヴェルバーグの所感〉



〈真偽不明ですが、ＣＩＧには本件に関わる人物への『干渉』許可が下りているという噂を耳にしました。本件に対して我がＰ探偵社が調査人員規模の縮小を決定したことも、この噂と無関係でないのでは？〉

〈本部の判断に対して僕は疑問を抱いています〉

〈『干渉』の許可とはつまり、ＣＩＧによる超法規的行為を黙認する記号であることなど僕が書くまでもないでしょう。非人道的行為を黙認するというなら、現政府も、我がＰ社本部も、かのリンカーン総統と大差ないということになります〉

〈納得がいきません〉

〈せめて、婦人Ｅの保護を……〉

案件Ｅ－二一号に関する報告書
署名、モニカ・ヌーヴェルバーグ

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの日記（ＸＶ）

一九〇八年。
青い空の日、紫の夜の夢。

きょうは、お昼前まで眠っていたんだけど、さ。
目覚めるまで、あたし、ずっと夢を見てた。

夢。Ａには言っていないし、Ａがこれまでみたいに「それは夢だよ」とか言ってくることもなかったけど、夢、見た。

眩しいくらいに白い、知らない場所でもないよ。薄暗い、えっと、お酒出してくれるバーでもない。もちろん一輌だけの地下鉄の「部屋」でもなくて。ここじゃない場所。

きっと、今でもないんだよ。ね。



きのうでもないし、その前でもない。
あしたのことでもないんだと思う。
だから、うん。夢。

――紫色の夜の夢。

変なかたちの星で埋め尽くされた紫色の夜空の下……。
あ、うん。変な星。今は、あの星のかたちがおかしいんだっていうこともわかるよ。
大きな建物の三階にあるお部屋。
クィーンズブリッジ団地Ｂ棟三二三号室。
カトリーンとユリアナの部屋にあたしはいたの。

あたしだけじゃ、なかったよ。
みんな。みんながいた。

カトリーンとユリアナは、にこにこ笑って、パーティの準備をしてた。
うん、パーティだよ。きっとあれはそうだったんだと思う。

ニューヨーク・チーズケーキを食べたあのテーブル。
ユリアナがいろんな料理を作ってくれてて、それをユリアナが運んで……。

ルチアーノもいた。強そうな大きな腕で器用に料理のお皿を運んでた。
隣には、ジンジャーがいたよ。ルチアーノに笑いかけてて、ルチアーノはいつもとあんまり変わらない顔だったけど、ちょっと、優しい顔だったかな。

サムがピアノを弾いてた。
素敵なピアノ。憶えてるよ、ジャズっていうんだ。
綺麗な響き。素敵な響き。胸いっぱいになるの。

ピアノのすぐ近くには、ミリアの大切なひと……ピーター、だっけ。
うん。彼がいて、目を閉じて聴き入ってた。
ジャズ、好きなんだね。

そんな彼をミリアが見てた。お酒かな、綺麗な桃色の何かが入ったグラスを持って、窓の脇のソファに腰掛けて。
あの部屋にソファなんてなかった気がするけど、ソファだよ。腰掛けて。

同じソファの反対側には、ジルーシャが黒い半巨人たちに何か言っていて。
優しい女王さまみたいな感じ。隣に誰かが寄り添ってるみたいだったけど、誰だったのかはよくわからない。黒い半巨人たちは、えっちら、おっちら、テーブルを倒さない

ように器用に歩いてユリアナを手伝ってた。

王さまもいたよ。顔だけのでっかい王さま。
そういえば黒い半巨人たちがうろうろできるぐらい部屋は広くなっちゃってた気がするけど、それでも入りきらなくて、奥の部屋にいた。いたっていうか、みっちり埋まってた。ドアから見える顔は、嬉しそうだった。みんながいるから、かな。

ネコビトたちもニャーニャーしてたよ。大きさまで猫っぽくなってた気もするけど、あれ、って思ってよく見たら人間くらいになってたりして。

ルース＝Bはテーブルの下に隠れて、お料理つまみ食いしてもぐもぐしてた。
マオとルシャが彼にぴったりくっつきながら、やっぱりもぐもぐしてた。もぐもぐしてたのは、鳥の足っぽいキノコ。

黒い獣の顔をした男のひともいた。
あたしを見て、ちょっと驚いてたけど、肩を竦めてちょっと笑ってさ。

……うん。みんな。

みんな、いた。
そういう夢。

Aはあたしの隣で――
どんな顔、してたっけ。よくおぼえてないや。
おぼえてないから、今度、あたしの前で同じ顔してもらうの。

夢だから、Aはそんなの知らないって言うだろうけど。
そんなの知らない。あれ、何か変かな。変じゃないよ。

……変じゃないよ。夢でも、いいんだ。

きょうも空は青くて、紫色の夜はもう見えない。それでもさ。

ね、A。

今はこれでいい。よね。

◆深淵の酒場にて（II）

――薄暗い、ジャズ・ミュージックの流れるバーだった。

ある種の神殿を想起する者もいるだろう。グリースやローマ、北欧、エジプトやインドのそれか、南新大陸に遺された太陽と生贄の神殿か。それらのどれでもなく、それらのどれとも似通うと感じる者もいる。

薄暗さに、暗黒の気配をこそ思う者もいるだろう。ただ、暗がりの、このバーにいるものたちはそれらの一切を想起しない。

感じない。思わない。

たとえばここに脆く儚い小さきものが迷い込み、恐怖の圧力に精神を圧壊させられたとしても、ああそうか、と思うだけだ。

そこに――

ドアを開けて訪れたものがある。白を纏った、黒い男だった。



紳士の身なりではあるのだろう。白い服。この場に於いてはやけに目立つ。何者にも浸食されざる圧倒的な白。宇宙深淵の更なる彼方、恐怖そのものたる無の白色を思う者もいるだろう。

対象的に男の膚は黒い。コーカソイドの顔立ちではあるのに、黒。そして。

そして、何よりも目を引く、男の顔の右半分。それは膚ですらない。金属。鉄だろうか。暗がりではその詳細な造形を把握することは叶わないが、異形に歪みうねるあり得ざる金属が男の顔の中央から右側を成していた。

見れば、袖から覗く右手もまた、金属で構成されていた。這いうねる混沌の闇を思わせる異形の金属。鉄。鋼。それとも太古に輝いたイーリディームか。

男は口を開く。生身の左の顔と金属の右の顔がそっくり

同じ動きをする。

軋む音がする。

鉄の音では、なかった。

『相も変わらず胡蝶の仮面か。変わらないな』

それは男の声か。合成音か。その両方か。

『これは、珍しいことが重なるものだ』

カウンターの奥にいる白い服の何者かが告げる。

顔の半分を胡蝶の仮面で隠した人物。

男の声に嘲笑が混ざるが、偽物だ。

『気に入った仮面は未だ見つからないか。ヒュプノス』

合成されたものに過ぎない。男には感情がないのだから。

『そう言う貴様はまた仮面を変えたようだな。その左半身、以前のものとは違う』

『これでも数百年は使っているが』

服の話をする人間のように、人間でない男は返答する。

もしも――

もしも、この場に他のものが在れば。男の言葉に苛立つ紳士もいただろう。何をも感じず、ただ男の存在そのものを忌み嫌う漆黒もいただろう。男が存在することすら感知しない白き輝きのものどももいただろう。

けれど、そこには誰もいない。バーの客は異形の男ひとりきり。

『それで。注文は』

白い服の人物が問う。

『ニューヨーク』

男は、静かにカクテルの名を告げる。声。合成音。どちらでもなく。

薄暗いバー。アラヤ識の境界、意識と無意識の境界にて。

夢幻の胡蝶の仮面纏う何者かは、男の言葉を耳にして、刹那、表情を僅かに変化させたが、すぐに元の無表情へと戻ると、鮮やかな手付きで――

赫い色のカクテルを作り出す――

ああ、その赫は――

男の、左の瞳の色と、同じ――

◆リリィ・ザ・ストレンジャーの夢、もしくは…

――一九〇八年一月某日。

――イェール大学。とある研究室にて。

「なあヴィヴィ、そんなに慌てて準備しなくてもいいんじゃないか？

そもそも、エリシアからそうしろって連絡があった訳じゃないんだろ？」

「念のためよ。念のため。割と凄いことしちゃったんだから、エリィとあたしたち」

「そりゃあ、まあ」

セルヴァンはヴィヴィへと頷く。

昨年末に友人であるエリシアが廃墟都市NYを歩いたことは明確に犯罪行為ではあったし、其処にふたりは大いに関与していたし、事にもよれば官憲の手が及ぶ可能性も有り得る話ではあったし、そうなる気配があったら「対処」はしようとふたりで決めていたことではあった。勿論、友人であるエリシアも一緒に。

まるで旅行のプランを立てるかのように、ふたりは逃亡計画について明るく言葉を交わし合う。将来に影響するはずの事態だった。大学の籍も剥奪され兼ねない。家族に迷惑が掛かる可能性もある。

それでも、後悔はなかった。

NYから帰ってきたエリシアの声を、ふたりは聞いていたから。

後悔はしない。

自分たちは、すべきことをした。

捕まるのなら、胸を張って捕まろう。

逃げるのなら、胸を張って逃げよう。

ふたりは昔と同じように笑い合う。

――そして、そんなふたりを見つめる、仔猫の姿がひとつ。

†††

ん？

あれ、あたし、何を見てるんだろう。

また、夢見てるのかな。

気付いたら、あたしは窓の外からふたりを見てた。

外っていうか中っていうか、開いた窓の枠にちょこんと立って。

あれ？　窓枠って、立ったりできたんだっけ。

あたし、両手と両脚をちゃんと枠の上に置いてる。

あれ。四つん這い？

あたし、小さくなってる？

例えば、まるで仔猫ぐらい小さくなってるなら、わからなくもないけど。

あれ？

首を傾げつつ、あたしは部屋の中のふたりを見る。

ひとりは女の子。女のひと？　綺麗な、女の子にも見えるし、大人の女のひとにも見える、お洒落な服を着たひと。

ひとりは男の子。男のひと？　Aと同じくらいの背格好で、窓の、あたしがいる場所のすぐ近くで椅子に座ってる。

ふたりは何かを話してる。

なんだろ。

「あんたも準備しておきなさい。何があるか分からないんだから」

そう言って、女のひとは本とか、紙の束とか、お化粧の小瓶とか手鏡とか櫛とか、小さな機械とか、色んなものをカバンに詰めて。

どこかへ旅をする準備をしてるみたい。

そうなのかな。



Ａは、旅をするのは人間の喜びのひとつだよ、とか言ってたけど、女のひとの表情は何だか違う感じ。でも、悲しいとか、寂しい感じでも、なくて。
なんだろう。
楽しそうな感じじゃない。
でも、どこか、ほっとしてる感じがしてる。

「逃避行ってか。俺はまあ、お前と一緒ならどこでも行くぜ」
「莫迦言わないの」
「これでもイェールの学生なんだけどなぁ」
「あたしは、あんたと一緒なんて嬉しくもないけど、でも、別々にどこかへ消えたりしたら、エリィは悲しむだろうから」
「わかってるって」

何だろう。トウヒコウ？
逃げるの？
どこかへ？

それって、良くないことだよね。
悲しむ、って言葉も聞こえた。
でも……。

女のひとは、そう言って、ちょっと笑ってる。
微笑んでる。
ほっとするような、誰かを想うような、そういう顔で。
ああ、あたし、このひとのこと、好きだ。
好き。何故か、あたしは、リリィ・ザ・ストレンジャーはそう思う。

「後悔、してる？」
「する訳ないだろ。俺たちは、やらなきゃいけないことをやっただけだ」

男のひとも、同じ表情になる。
あ、このひとのことも、あたし、好きかも知れない。
うん。好きだ。

ふたりとも、ちょっと顔を見ただけなのに。不思議。

「あたしも。してない」
「気が合うな。本当に逃避行になったとしても、うまくやっていけそうだ」
「冗談」
「俺は冗談は言わない男だぜ」
「はい、はい」

頷いて――
ふと、女のひとが、窓枠に座ったあたしのほうを見た。

「あら、可愛い。いけない話、聞かれちゃったかな」
「ん。仔猫か」
「エリィも、仔猫、好きだったわよね」
「どうだったかな」
「好きよ、絶対」

女のひとが近寄って、あたしの頬を撫でる。

暖かな手。

あたしは――

なんだか、分からないけど。
あなたたちの旅が、うまくいくといいねと伝えたくて。
口を開いて、一言。

「ニャア」

あれ？
あたし、今、ニャアって言った？？

（『紫影のソナーニル　Ｒｅｆｒａｉｎ』
本編終了後の『ＥＸシナリオ』につづく）



◆作者不明記述

この項に記されているすべてについて、真偽は不確かである。記述者は優れた碩学だったが大いに狂気じみたところがあり、現在では行方不明となっており、情報としての信頼性はごく低い。ここに記されている事柄の数々は、オカルトめいていて、あまりに途方もない話ばかりである。すべての記述が事実と異なっている可能性がきわめて高いことは、考慮しながら読んでもらいたい）

遙かな過去——
自然と、幻想と、神々が共に在り続ける時代があった。
けれど、人類が文明という灯りを手にするに伴って、彼らはその姿を消していった。
光に追いやられる影のように。闇のように。
排煙の灰色に掻き消される、星々のように。
けれど。
我々は見つめる幻想を失ったが、幻想ならぬものに、見つめられてもいる。
我々の現実には幻想も神もないが、夢のさいはてであれば。あるいは。
さあ、思い出そう。

人よ。
人よ、今より、深淵に眠る真実と狂気を蘇らせよう。

人は、ふるきものを覚えているだろうか。
精霊、妖精、神々など。かつて人々の営みと共にあった古きものたち。
それらは現実の生物等ではなく、あくまで人々の夢見た幻想に過ぎない。
黒の王がこの星へと飛来して以降は、タタールの門を通じて暗黒星シャルノスへ移住するものも少なくはなかったようだが、意味はない。進歩し発展する人類文明の灯りの前に、それらは、影の如く消えていった。哀れなものだ。
世界は人のものだ。
世界は鉄と機関とが埋め尽くすのだ。
幻想の生くる隙間など、ありはしない。

人は、黒の王を覚えているだろうか。
蕃神。
神々の王。
闇に吼えるもの。這い寄る混沌。暗黒宇宙そのもの。黄金を求めたもの。
ふるきものなど比べものにならない。蕃神は、黒の王は、現実、物質としての存在を可能とし、あらゆる暗黒を領域とする。
我らの惑星を内包する銀河、それの集う銀河団、さらにそれを所有する広大なる無限暗黒、すなわち、宇宙、宇宙、宇宙におけるある種の形質のひとつが黒、暗黒、外なる神の一柱であるものだ。

黒の王。一〇〇〇の化身を有するとされ、銀河規模、惑星規模の顕現体さえかのモリアーティ教授は若き頃に観測し、論文を残している。あれはA．Z．T．T．の存在を看過したものではあったが……。
ああ、黒の王。外宇宙からこの惑星へと飛来した外なるものよ。姿を隠した主神の痕跡たる黄金瞳を求めて暗黒宇宙を彷徨った、深淵騎士、漆黒の蕃神よ。
　この星に訪れて後、それは、神王としてふるきものを比較的穏健に支配・君臨したという。
消えゆく幻想に、かつて消え去った外なるものの横顔を見たか。
神代終焉の後も黒の王は滅びなかった。
覚えているだろうか。
人よ、彼は暗黒の宮殿で、ひとりきりの王となることを選んだのだ。

けれど——
近年、一部の形質に変化を来したようでもある。
何があったのか。何を見たのか。誰を見たのか。

　一九〇八年、背の高い誰かが己の影から喚び出した闇に吼えるもの（ハウラーインダークネス）の矮小な模造品（レプリカ）は、黒の王がその元力の僅かな一部を貸し与えたものではあるが、王が何かに助力をしたのはいつ以来のことだろう。
　人よ、覚えているだろうか。

人は、シャルノスを覚えているだろうか。
黒の王の宮殿たる暗黒星。
宇宙の遥か彼方に位置し、この星や惑星カダスからは遠く離れたそれを。太陽や恒星が周囲に存在しない深淵宇宙に存在する暗黒の惑星を。
かつて、黒の王が座していた場所だ。
今は誰の宮殿でもない。
黒の王の大型の顕現体が数体、そこで眠りに就いてはいるだろうが、ただそれだけのことであって、目覚めの時は近くはない。それだけのことだ。
けれど、人よ、それを忘れてはならない。

人は、月の王を覚えているだろうか。
時計仕掛けの神。
チクタクマン。
這い寄る混沌。時間人間。昏き意思。発狂の時空。異空より来たる月の王。
それは、史実の世界から訪れた外なる神の一柱だ。宇宙における形質のひとつ、時間と空間を司りし外なるものヨグを喰らい、あらゆる時空における連続体となることを選んだ、残酷なりし歯車と混沌の時の神だ。
カダスの月を支配せしものだ。
すなわち、並行し偏在する宇宙における黒の王ではあるが、まったく異なり、こちらの黒の王

とは違う。違うのだ。何もかもが違うのだ。
人よ、忘れてはいけない。月の王は、あらゆる知的生物を、精神動物を、ひとを、人々を、特に類人猿から進化を果たしたこの星の人類に対して残酷な興味を抱いているのだ。月の王があなたを観察する時、あなたの精神が幸福を得ることは二度とないだろう。
誰も月の王から逃れることはできない。
月の王が認識した宇宙は、もう、駄目だ。
あの瞳に見つめられてしまえば、誰も彼もが、月の王の、夢の辿り着く箱庭（ソナーニル）で蠢く人形に過ぎない。大機関時計が、終末時計の突き立った惑星は、もう、駄目だ。人よ、せめて、それを知らずに死んでいくがいい。知ってしまえば、そう、選択肢は多くない。痛みの大司祭クライブのように狂気へと落ちたるは人の敗北だ。そうなるぐらいであれば、そうだ、私は……。

私は……。

けれど――
先年、何かがあった。
かのA．Z．T．T．に属する《虚空に浮かぶ黄金の瞳》の巨大な欠片、カダスの月は一九〇七年一二月二五日に一度だけ月の王を裏切り、結果として、月の王は、史上初の独立した現象数式体であるストレンジャーのささやかな反撃を受けることとなった。
喝采せよ。
喝采せよ。

人よ、ささやかなる黄金銃は残酷な神をわずかに圧した。
人よ、穢れしものの来たる日は近けれど、いまだ、希望を失わじ。

人は、穢れしものを覚えているだろうか。
穢れなりしもの。
人の生み出したもの。
文明なりし眩さの影たるもの、その名は汚染精霊。炎の精霊はチェレンコフ光の精霊と化し、水の精霊はヘドロの精霊と化し、風の精霊は排煙と煤の精霊と化すのだ。
人よ、外典における滅びのうち幾つが穢れしものによるものかを忘れるな。アブホールは先触れに過ぎない。忘れるな。
人よ、イリジアの慈愛を恐れよ。

人は、イリジアを覚えてはいないだろう。
星々の煌めきそのものである宮殿と庭園の美しさは瞳を潰し、心を喰らう。
誰も彼もがその美しさと高みの気配に耐えることはできない。
イリジア。白きものたちの宮殿。庭園。大型の恒星とも、ベテルギウスとも、ヒヤデスとも、さる銀河の中心とも言われるがおよそ人がその所在を明らかにすることなどできようもない。
サニドの煌めきを前に、言葉も、思考も意味を持たない。
ああ、サニド！
美しきは黄金の瞳のサニドよ！

イリジアの主。王にして女王。王女にして王子。
旧き神。灼き尽くす白熱。ザ・ホラー。猊下。
慈愛に充ちたサニドは、あらゆる知的生物、精神体、人々の守護者を称するという。
ただし、その慈愛が人類にとって有益だという保証はないのだ。極まりし美しさはおよそ脆く儚きものどもにとってな毒にしかならない。恐るべきものよ、美しきものよ、サニドよ、煌めきの猊下の姿を想像しただけで私の精神はひび割れ砕け散る。B二六星雲を消し去ったものこそ貴様の慈愛に違いあるまい。
きわめて純度の高い黄金瞳を有するが故に、その身がA．Z．T．T．そのものもしくは〈対〉であると称するサニドよ、いつ、お前は、その傲慢こそが黒の王を遠ざけることに気付くのだろうか。
人よ、覚えていてはならない。
サニドは黒の王を愛したが、その愛は我ら人の思う愛なるものとは異質であって、ある種の物理宇宙の法則の一種であって、ヒュプノスの嘲笑を招くだけであることを。

人は、ヒュプノスを覚えているだろうか。
イリジアの一柱。
意識と無意識の境界。夢幻の胡蝶。蝶の仮面。
それは、集合的無意識（アラヤ識）の観測者であるものだ。本来は個としての人間などには一切興味を払わないはずであるのに、無自覚に現象数式を操ることで実在と非在の領域を抜け、自然にその身を偏在させて《勝利の塔》を昇りつつあるストレンジャーに興味を抱き、あろうこと

か、ドリーム・クリスタライザーや黄金の蜂蜜酒を入れていたグラスを与えた酔狂なる何者かだ。

人よ、忘れることなかれ。

ヒュプノスも所詮はイリジアのものにすぎない。慈愛を口にすれど、それは、我々の思うそれとは異なるものだ。

純然たる興味から、ヒュプノスは、その目でストレンジャーの観察を続けようとしていたが、それがどういう結果となったかはご覧の通りである。

人よ、ヒュプノスとはバールでのみ出会うべし。

ああ……。

そうだ、私も、そろそろ、バールへと向かおう。

現実などくだらない。

機関排煙のひりひりとした煙さが渦巻く現実よりも、私は、意識と無意識の彼方、文明によって哀れにも消え去った幻想の果て、遥かカダスの彼方、宇宙深淵、狂気の神々がたゆたいうねる《夢のさいはて》へと私は至るのだ。

バールへと。

意識と無意識の境界。ヒュプノスそのものである領域。

それは、薄暗い、諸柱の酒場（バー）だ。

本来は、集合無意識たるアラヤ識の秘密を知る者だけが精神の一部をこの領域に触れさせることができるのだという。ふるきものはせいぜいが影を走らせるぐらいしかできないだろうが、黒

き王、イリジアのもの、そういった連中にとっては、何ということもない。ある種の何かに到達した人間も、多大な何かを犠牲とすれば、辿り着くことができる。

たとえば、万能の男であるとか、この私であるとか。

この領域ではあくまで自らの無意識を集わせるのみであり、たとえば電信通信ほどの確固とした情報のやり取りを行うことはできないが、ああ、それでも良い。

構わないとも。

ああ、私は、今宵も夢のバーでたゆたうのだ。

夢のバー。バール。かつてのこの星において諸王、すなわち黒の王の臣下の一柱とされたバアル複合神とBARをかけあわせているそうだが、訪れる客は誰も信じない。

ああ、私は今日もバールへと向かおう。

人は、私を指さして嗤うだろう。機関都市シアトル・シティの路地裏の片隅、地下階にひっそりと佇む寂れたジャズ・バーに向かうだけだと嗤うだろう。

人よ、お前たちは何を言っている？

私は神々の酒場へと通っているというのに。

黒の王に畏怖し、外なるものの気配に怯え、サニドの美に震え、ヒュプノスの酒を飲み、万能の男を羨み、その永遠の従者へ静かに欲情する。私は神々の静かな宴を盗み見ているのであって、他の何であることもない。私が下るのは窮極の門への豪華絢爛に輝く螺旋階段であって、他の何である訳もない。シアトル・シティ？　お前は何を言っているんだ？　このきらびやかな異世界がイリジアでないはずがないだろう。シアトル。悪い冗談だ。

さあ、行こう。

そして私は、今夜も、機関都市シアトル・シティの路地裏の片隅、地下階にひっそりと佇む寂れたジャズ・バーに向かう……。きらきらしたものなど欠片もない、黄金などありようもない、煤で汚れた階段を降りて、地下五階にある緑色の扉をくぐり……。

アルコールだ！

アルコールが、深淵に眠る真実の知識の扉だ。

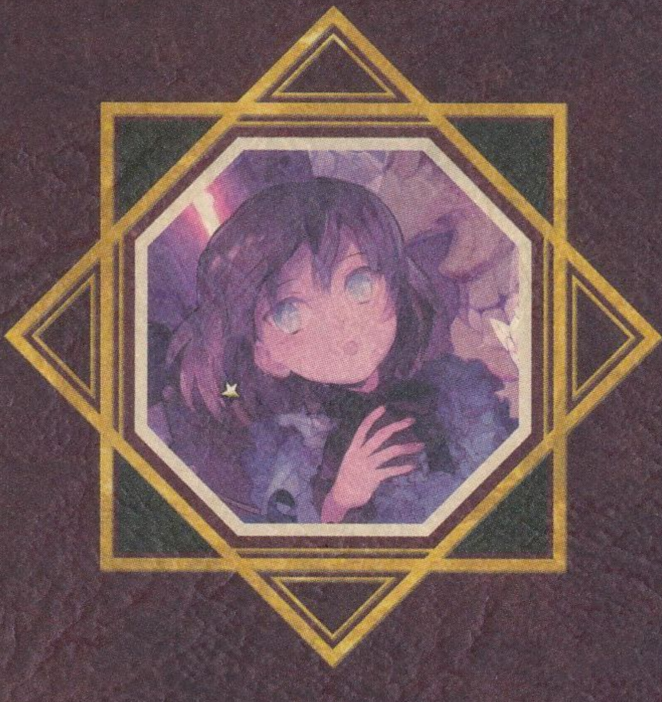
ああ、人のいい黒人店主が私に一杯目だけは奢ってくれる。

人よ、私は、狂っている……。

（※転載者注、シアトル・シティにバールの名を有するジャズ・バーは実在する。バール・アポカリプス。消失以前の一九〇一年にNYから移住した黒人男性の経営する店であり、かつてのブロードウェイにおける最先端音楽だったジャズの音楽盤再生が店の特徴。残念ながら、夢想と狂気と深淵の神々ではなく機関工場労働者たちの集う店である）

“紫影のソナーニル Refrain”予約特典冊子
大機関辞典
The Engine Dictionary

2014年2月27日　発行
企画・執筆／桜井光　挿絵／ＡＫＩＲＡ
編集・発行／株式会社ビジネスパートナー・Liar soft



NOT FOR SALE